

秋田県における中世宝篋印塔の型式と分布

—特に八郎潟周辺の場合を中心として—

磯村 朝次郎*

はじめに

宝篋印塔の起源は、インドの阿育王が仏教興隆のため全国に塔8万4千基を造ったという故事にならない中国後周の顕徳2年(955)呉越王銭弘俶が同じく8万4千基の小塔を造り、その中に宝篋印心呪経を納め諸国に頒布したことはじまる。その後、わが国へも伝わり金泥塔とよばれているのがその祖型と説かれている。石造の宝篋印塔が造立されるのは鎌倉時代に入ってからで鎌倉やぐら出土の宝治2年(1248)塔が在銘塔最古。ついで、大和興山の正元元年(1259)などがある。以来、中世日本の各地にさかんに造立され、五輪塔、板碑とならぶ普遍的な石造遺物になっている。(川勝1971・田岡1968・藪田1972)

本県における宝篋印塔については、『秋田県史』一考古篇の中で奈良(1960)が、男鹿半島内5か所の所在遺品を記載したのが最初であった。

隣接県の調査状況をみると岩手では、最近市町村の調査実績をもとに、同県立博物館の大矢(1980)による集成と掘りおこしが行なわれ、奥羽山脈を狭んで東西の遺品を比較できる素地がつくられている。

石造遺物をとおしてみる本県中世史の局面は板碑、五輪塔、宝篋印塔を主とし、これらの年代、形式、石質、信仰内容、立地、分布さらには領国圏等の総合によって、ある程度、構成できるものと推察される。

このうち板碑については深沢(1905)、奈良(1958)榊田(1963)らによる先行調査、研究があり、五輪塔については、かつて磯村(1977)は不十分ながら中間的報告を行ったことがある。

宝篋印塔は、板碑、五輪塔に比べ構造が複雑で遺存例も少ないが、県史発刊以来20数年を経、その間、八郎潟周辺において僅かではあるが新発見が得られてい

る。

本稿ではこれらを記載、整理し、そこからひきだされるかも知れない地域的特性、系統性などについて若干の考察を試みる。

I 中世宝篋印塔についての記載

所在地、部分、法量、由来等について記載する。Noは表1の番号に一致する。なお本稿では中世の時代区分を田岡案(1977)にしたがって用いる。

1. 男鹿市門前〔第3図1a-1e〕

基礎(1) 反花付壇上積式、風化甚しいが複弁三葉に隅複弁の反花を刻出したものと認められる。高さ24cm、上端の塔身受けは高さ0.5cm、一辺21cmの正方形座につくる。葛は厚さ4cm、幅33cm、地覆の厚さ3.5cm、束の幅4cm、砂岩。

基礎(2) 反花付壇上積式、高さ27.5cm、複弁三葉、上端の塔身受けは高さ0.5cm、一辺22cmの正方形につくる。葛は厚さ4cm、幅33cm、地覆の厚さ3.5cm、砂岩。

笠(1) 高さ26.5cm、上5段、上端一辺11.5cmを測り、径10cm、深さ7cmの円筒形柄孔を彫る。磨滅して段形は目立たない。下2段、下端一辺22cm×21cm、軒の厚さ4.5cm、幅3.3cm×32.5cm、隅飾は軒端より直立する2弧で高さ10cm、底辺10.5cm、茨は1段目にくる。磨滅しているが、わずかに輪郭をまいた痕跡が認められる。砂岩。

笠(2) 高さ28cm、上5段、上端一辺15.5cm、径9.8cmの円形柄孔を彫る。下ノ段、下端一辺26.5cm、軒の厚さ4.2cm、幅33.5cm、隅飾は軒端より内へ入って作られるらしいが、その部分は欠損している。2弧で輪郭を巻く。茨は段形1、2段の中間にくる。高さ10.8cm底辺11.2cm(推測)砂岩製で(2)と(4)は一具とみられる。

*秋田県立博物館

磨滅しやすい砂岩製宝篋印塔の中で原形をよくとどめた遺品である。

笠(3)、(4) 旧永禪院跡地に存したものであるが、昭和40年代、私設「入道崎博物館」に五輪塔水・火輪部とともに陳列され、同館閉鎖後は行方不明。未採寸であるが(3)は上5段、下2段、隅飾は2弧で輪郭を巻く。流紋岩製。(4)は上6段、下2段、隅飾は2弧輪郭を巻くが、外傾著しい。凝灰岩製。

現在、門前には赤神神社五社堂と長楽寺が存するが古くは九寺四十八坊あったと伝えられる。天和元年(1621)編の『本山縁起別伝』¹⁾の伝えるところによると慈覚大師来りて堂塔寺院を建て赤神山日積寺永禪院と号し、熊野の本宮に擬え金胎兩部の峰として本山、新山と定めた。安倍、清原、藤原ら奥羽歴代の支配者の寄進を受け、鎌倉期には地頭橋氏、南北朝期には安東氏の庇護があり、明徳2年(1390)天台宗より真言宗に転じ、高野山竜光寺末派となっている。推定江戸時代初期の『男鹿図屏風』²⁾には日積寺永禪院を中心に塔頭吉祥坊、長楽寺、泉光坊、正覚坊、両蔵坊、政光坊、仙寿坊などの堂宇が描かれている。赤神神社五社堂中央堂内の厨子は室町期の建築で国指定重要文化財、その他、県指定の平安末木造の十一面観音、聖観音菩薩立像、室町時代石造狛犬があり、長楽寺には旧永禪院所蔵の推定鎌倉時代末の金剛胎蔵両界曼荼羅等の文化財が伝存している。

2. 船川港椿墓地 [第3図2]

現総高92.8cm、相輪の上部の6輪と請花・宝珠を欠くが、当地方の宝篋印塔としては完型遺品といてよい。

基礎、反花付壇上積式、複弁2葉に隅複弁の反花を刻出し、高さ33.8cm、葛は厚5.5cm、幅34cm。東、地覆部と別個に造作された唯一の例である。塔身受けは高さ0.9cm、一辺22cmの正方形をなす。

塔身 高さ18cm、幅20cm、南西に16.5cm×13cmの舟形輪郭を彫り、線刻単弁5葉の上に像高12cm、推定定印の弥陀坐像を浮彫する。東西両側は径15cmの線刻月輪内にsa, sah種子を刻する。背面は無地である。

笠 高さ23.6cm、上5段、上端一辺13.5cm、下2段下端一辺23cm、軒厚5cm、幅34.5cm、隅飾は2弧で輪郭をまき茨は中央よりやや下方にくる。高さ11.5cm、軒端より1cm入って立ち、0.5cm外傾する。

相輪は伏鉢12cm、高さ6cm、請花は高さ5cm、単弁8葉、九輪は三輪7.5cmを残す。石英安山岩。本塔については川勝(1978)の記載もある。

3. 船川港女川地藏院 [第3図3]

基礎 輪郭付、格狭間入、高さ33.5cm、幅36.5cm。反花複弁3葉、隅単弁、四方の側面は24.5cm×17cm深さ0.9cmの輪郭を横位に彫る。内に素文の格狭間を入れる流紋岩。

4. 船川港金川洞泉寺 [第4図4ab]

塔身 高さ21cm、幅22cm、上面に径10cm、深さ5.3cmの奉籠孔をうがう。sah・hrih・sa種子を刻む。安山岩。
笠 高さ27cm、上5段、上端一辺14cm、下端一辺24cm、軒厚6cm、幅36cm、隅飾は軒端より1.0cm入って立つ。高さ13.5cm、底辺12.5cm、2弧で輪郭は底辺までまく。茨は鋭く内へ入る。上弧内に径5cmの月輪を浮彫する。安山岩。

5. 脇本富永大倉 [第4図5]

基礎 反花付壇上積式、高さ34.5cm、複弁2葉に間弁2個を入れ隅複弁の反花座は高さ5cm。塔身受けを0.5cmに盛り、一辺22cm。葛は厚さ6cm、幅35.5cm、地覆厚6.8cm、葛端より0.8cm入り、幅6.5cmの束をつくる。安山岩。

笠、高さ29.5cm、上5段、上端一辺18cm、径8.5cm、深さ8.5cmの柄孔をうがう。下1段、下端一辺29.5cm、軒の厚さ6cm、幅35.5cm、隅飾は軒端より0.6cm入り、2弧輪郭を巻き高さ12cm。茨は上2段の中央にくる。安山岩。

相輪、残存高さ28.9cm、素文の伏鉢は径14.5cm、請花は単弁8葉、九輪は八輪を残し、その上を欠失。安山岩、塔身を欠くが上記の3個体は一具であろう。

このほか砂岩製の高さ25cm、反花の磨滅した基礎と塔身とみられるもの各一個体がある。さらに安山岩製五輪塔、地輪4、水輪6、火輪2、宝珠3(内各1個体は移転)、頭部方錐形の板碑1基がある。これらはすべて1953年頃背後の丘陵端から多数の焼骨を伴い、転落してきたものである。

6. 脇本富永飯森 [第4図6]

笠 風化磨滅しているが現存高さ23cm、上下の段数不明瞭だが、上5段下1段であろう。上端一辺13cm、推測軒幅38cm。このほか風化した塔身とみられるものが1個ある。いずれも砂岩。また安山岩製相輪、先端の請花、単

弁8葉の宝珠がある。

7. 脇本富永飯森 [第4図7]

笠 高さ26cm, 上5段, 上端一辺13cm, 下1段一辺24cm, 塔身にのる部分を一辺18.5cm, 線刻方形に区画する。軒厚4.5cm, 幅29.5cm, 隅飾は軒端より0.8cm入り高さ8cm, 2弧で輪郭をまく。安山岩。

8. 脇本富永飯森 [第4図8a~c]

基礎 反花付壇上積式, 高さ22cm, 複弁2葉で3個の間弁を狭み, 隅複弁の反花座, 上端を0.3cm盛り一辺17cm方形に区画する。中央に径9cm, 深さ5cmの円形奉籠孔をつくる。葛厚4cm, 幅28cm, 地覆厚4.5cm, 葛端より1.5cm入って束幅4.5cm。底部に7.5cm×7.0cm方形の柎孔をうがう。安山岩。

塔身 高さ13.5cm, 幅18cm, 四面に東a, 南ā, 西am北ah胎藏界四仏を表徴する種子を刻む。安山岩, 基礎と一具であろう。

9. 脇本浦田宗泉寺 [第4図9ab第5図9c]

基礎 反花付壇上積式, 高さ21.2cm, 反花は磨滅し, 葛の上端との境が不明瞭であるが, 葛の厚さは推測4cm, 幅31.5cm, 地覆厚4cm, 葛端より1.2cm入って束の幅6cm安山岩。

笠 2基体分ある。いずれも砂岩製で磨滅甚だしい。(1)は現存高18.8cm, 軒幅31cm, 上5段, 上端一辺12cm, 径9cm, 深さ8cmの円形柎孔, 下の段数磨耗し不明, 1段か。隅飾は形跡とどめていない。(2)は現存高20.5cm, 軒幅30cm, 上5段上端一辺12cm, 径9.5cm厚さ9cmの円形柎孔をうがう。下段は1段か。隅飾は2弧輪郭を巻いた形跡を1個残す。高さ8cm, 底辺8cm。同墓地にsa種子の推定南北朝期の板碑, 貞和2年(1346)在銘の六字名号を彫る時宗系の板碑が1基墓地より発掘, 現在境内地に移されている。

10. 脇本樽沢十王堂 [第5図10]

笠 高さ20.3cm, 上5段, 上端一辺12.5cm, 8.5cm×8.5cm, 方形の柎孔がある。下1段, 高さ1.8cm, 一辺24cm, 塔身にのる部分は19cm×19cmの方形輪郭線を入れる。軒厚6cm, 幅29.3cm, 隅飾は軒端より0.8cm入って2弧で幅1.8cmの輪郭を巻く。高さ8cm, 底辺9cm, 安山岩。西方に現在中山神社がある。『秋田郡村々神社調帳』によると境内には薬師堂, 観音堂, 伊勢堂, 山神堂, 虚空藏堂などの社地があり, 別当は医王寺であったが明治以降廃れ, 十王堂は残って南光

院の名で呼ばれていた(大島1985)。鎌倉後期の五輪塔, 推定室町期の板碑が伝存している。

11. 脇本万境寺 [第5図11]

笠 高さ16.9cm, 上5段, 上端一辺12.5cm, 径6.5cm, 深さ5cmの円形の柎孔をうがう。下より4段目までの段形は直角をなさず, わずかに上向きに造られる。下1段, 高さ1.5cm, 一辺19.3cm, 軒厚5.5cm, 上幅23.5cm下端22.5cmで梯形となる。隅飾は軒端より0.3cm入って立つ。1弧素文, 高さ5cm, 底辺5.5cm。凝灰岩。

12. 若美町小深見峰玄院 [第5図12]

基礎 反花付壇上積式, 高さ22.5cm 複弁三葉, 隅複弁の反花。塔身受けは21cm×21cmの方形線刻。葛は厚さ5cm, 幅28.5cm, 地覆厚5cm, 葛端より0.8cm入って幅4.5cmの束が立つ。安山岩, 室町後期か。昭和49年まで物置の土台になっていた。境内に安山岩製五輪塔地輪部に胎藏界大日aを刻む残欠と板碑が1基ある。また北向いの神明社脇に推定室町前期の安山岩製頭部方錐形の板碑が1基伝存する。

13. 若美町福川福昌寺 [第5図13a~c]

基礎(1)反花付壇上積式, 高さ31cm, 複弁一葉に2個の間弁を入れ, 隅複弁の反花, 上端一辺21cmの方形座, 葛は厚さ6cm, 幅33.5cm, 地覆厚7cm, 幅6.5cmの束は葛端より1.0cm入って立つ。この基礎は境内入って左の安永3年3月在銘の石刻阿弥陀如来坐像の前に埋設されていたものである。

基礎(2) 反花付壇上積式, 高さ34.5cm, 複弁三葉, 隅複弁の反花上端一辺23.5cm, 方形座, 葛端より1.3cm入って立つ。安山岩。

塔身 高さ29cm, 幅27.5cm×26 隅丸の立方体で隅丸方形線刻内にhūm· trāh, hrīh· vram 金剛界四仏の種子を刻む。安山岩。

笠 高さ30cm, 上5段, 上端一辺20cm×19cm, 下1段一辺32.3cm, 軒厚6cm, 幅36.5cm, 隅飾は2弧輪郭を巻き, 軒端より0.5cm入って立つ。高さ10cm, 底辺11.0cm, 安山岩。基礎(2)と塔身, 笠は一具のものであろう。

同寺の境内にはこのほか安山岩製, 自然石利用の推定南北朝期板碑をはじめ頭部方錐形の板碑が多数存在する。また山神社にも数基の板碑がある。

14. 若美町福米沢墓地 [第6図14]

基礎 反花付壇上積式, 高さ23cm, 複弁三葉, 隅複弁の反花座。塔身受けの方形座は深さ0.9cm, 18cm四

方に彫りくぼめる。葛の厚さ4cm, 幅31.5cm, 地覆の厚さは4.5cm, 束は5.5cm, 葛端より1.5cm入って立つ。

塔身 高さ22cm, 幅18cm, たて長の立方体。南面に舟形輪郭を彫り, 内に三葉の蓮弁上, 高さ15.5cm, 膝幅10.8cm, 推定弥陀如来の坐像を陽刻する。東西両面は方形の輪郭線で囲み, 内にsa, sah種子を刻むが風化甚だしく消滅寸前の状態である。

笠 高さ22cm, 上5段, 上端一辺14.5cm, 径8.5cm 深さ4.3cmの円形柄孔をうがつ。下1段であるが0.6cmと極めて低く, 一辺24cm。軒の厚さ4.5cm, 幅33cm, 隅飾は高さ10.5cm, 底辺10cm, 2弧輪郭を巻き, 軒端より0.5cm入って立つ。茨は2段目につく。現総高67cm 相輪を欠くが, 元来5尺塔であったろう。安山岩。西方脇に頭部方錐形の板碑がある。

15. 八郎瀉町浦大町善知鳥 [第6図15]

基礎 反花付壇上積式, 高さ31cm, 複弁三葉, 隅複弁の反座であるが磨耗甚だしい。塔身受けは24.0cm×24.5cm側面の高さ26cm, 葛の厚さ5cm, 幅31cm, 地覆厚5.5cm葛端より1.5cm入って束を立てる。束の幅は右6.5cm, 左7.0cm, 内部を深さ1cm, 11cm×10cmにほりこんでいる。東に元禄三年の刻銘がある。このほりこみはその時のものであろう。上にのる五輪塔火輪部も, このときに再加工された例の少ない遺品であらう。石英安山岩。

16. 八郎瀉町浦大町善知鳥 [第6図16a~c]

基礎 反花付壇上積式, 高さ31.2cm, 複弁三葉の反花座。葛の厚さ4.8cm, 幅37cm, 地覆厚6.0cm, 束は葛端より1.5cm入って幅7.6cmにつくる。写真は左側面。輪郭内につぎの紀年銘を三行に刻む。

五月□

應永十五天

廿四日□

底部を一辺27cm×27cm, 最深部で5.6cm, 浅鉢状にほりくぼめている。

笠 高さ24cm, 上5段, 上端一辺15.5cm, 径9.5cm 深さ5.8cmの円形柄孔, 下1段, 高さ1.0cm, 一辺, 21.4cm, 軒の厚さ6.5cm, 幅30cm, 隅飾は高さ8.5cm底辺11.5cm, 2弧で輪郭を巻くが形はルーズである。いずれも安山岩であるが基礎に比べ笠幅が小さく, 別個体であらう。

相輪 残存高30cm, 伏鉢, 請花の平面形は1.8cm×

16cm隅丸長方形を呈する。高さ6.5cmの伏鉢に単弁11葉高さ6.0cmの請花に単弁12葉を刻む。九輪は五輪を残し, 各輪の高さ3.5cm, を頂部径13cmを測る。石英安山岩で上記の基礎, 笠とは別個である。三分の宝篋印塔が存したのであらう。

17. 五城目町馬場目町村広徳寺 [第6図17]

寄せ集め塔, 下から五輪塔地輪, 印塔基礎, 五輪塔火輪, 印塔笠, 五輪塔宝珠の順に積む。

基礎 反花付壇上積式, 高さ22.7cm, 複弁三葉, 隅複弁の反花座, 葛の厚さ4cm, 幅31cm, 地覆厚4.5cm, 葛端より0.9cm入って, 幅5.5cmの束をつくり, 各面に格狭間を入れ, 脚間は狭く3cmを測る。

笠 高さ20.2cm, 上5段上端一辺11.5cm, 軒の厚さ3.5cm, 幅31cm, 下2段, 下端高さ1.5cm, 一辺19cm, 隅飾は軒端より0.9cm入って2弧輪郭を巻く。高さ9.5cm, 底辺8.5cm, 茨は2段目中間にくる。

広徳寺は馬場目氏の菩提寺で季宗の開基。現在地より下の町村剣林にあったが, 中世城館馬場目城廃城後城主の茶室跡に移ってきたものという。

18. 昭和町豊川船橋 [第6図18]

基礎 反花付壇上積式, 高さ22cm, 複弁三葉の反花座, 磨滅しているが隅も複弁であらう。葛の厚さ4cm, 幅26cm, 地覆厚4cm, 葛端より1.0cm入って幅6.0cmの束を立てる。塔身受けは段形をなさず16.5cm×17.3cm, 浅い方形の線刻を施す。安山岩。

19. 昭和町豊川船橋 [第7図19]

笠 磨滅甚しい砂岩製の笠である。現高25cm, 段はかろうじて上5段を数えることができる。以下推測値を掲げる。笠上段一辺11.7cm, 9cmの円形柄孔がある。下段は段数不明, 軒の厚さ5.0cm, 幅33cm, 背後の丘陵からは珠洲系蔵骨器が出土し, 流紋岩製の五輪塔火輪残欠もある。

20. 秋田市下新城中野羽黒神社 [第7図20]

塔身 高さ15.5cm, 幅16.0cm。南西に深さ2.3cmの舟形輪郭を彫り, 線刻五葉の蓮弁上に高さ10cm, 膝幅9cm, 定印の像容を陽刻する。東西両面は各12cm×12cmの郭線内にbhai (薬師)・sa (観音) 種子を刻む。

笠 高さ26cm, 上5段, 1, 2, 3, 4段は水平をなさず, ゆるく弧をつくる。上端一辺14.5cm, 径9.5cm, 深さ6cmの円筒形柄孔をうがつ。軒の厚さは3.5cm, 段形のそれに比べて薄く, 幅27.5cm。隅飾は軒端より

0.8cm入って2弧輪郭を巻く。高さ14cm, 底辺8cmの馬耳状を呈し, 茨は中央に入る。

相輪 残欠で高さ14.5cm。径10.5cm, 請花と九輪のうち三輪を残す。安山岩製。

羽黒神社はもと下新城長岡字笹島の俗称丸門にあったが明



第1図 真澄画、岩城塔身

治45年, 周辺の神社を合祀して現在地に移築された。

21. 秋田市下新城岩城 [第7図21]

塔身 高さ23cm, 幅19.8cm, 3面に19.4cm×16.0cmの長方形の郭線内に舟形輪郭を彫りくぼめ, 五葉の蓮弁上に像容を陽刻する。南面の坐像は高さ14cm, 東西の像は12.5cmと小さく, 脇侍を表わしたものであること明かである。弥陀三尊であろうか。安山岩。

この塔身は文化8年, 菅江真澄が岩城城跡にあった館神の社に詣で紀行『箚廻金棧棠』(1811)に書き残したそれではないかと推測される。

「はちすの上にあなうらをむすびたる仏像を, 方なる石の面にきたみたり。こや, いつつむすびのすがたをつみなしたる, もとつ石のつ, いはゞはにやすひめのおほん神にもたくへつべう」とのべ, これを図示している。図には正面の像容のみが描かれ, 左面にはない。省略したものであるかも知れない。

22. 秋田市飯島穀丁雲祥院 [第7図22]

反花付基壇, 総高20cm, 幅60.5cm×61.0cmの1枚石を2段に加工している。下段を高さ14.5cmに切り, 上端より6cm入って高さ5.5cmの四辺を残し38cm×38cmを基礎受けの方形座とする。その四辺に反花をつくる。弁の刻出は複弁二葉に間弁を入れ, 隅複弁につくる企画であったと思われるが, 対称を欠き, きわめて粗略である。

基礎 反花付壇上積式, 高さ35.6cm, 塔身受けは高さ1cm, 26cm×25cm, 反花座は高さ5cm, 複弁三葉に間弁2個を狭み, 隅複弁とする。側面高さ27.6cm, 葛の厚さ6.3cm, 幅6.0cm, 6.5cm四面に格狭間を入れ, 脚間5.5cmを測る。

笠 高さ50cm, 上5段, 上端は一辺21.5cm, 下2段

で下端一辺43.5cm。軒の厚さ8.7cm, 幅61.5cm。隅飾はNo.1の門前笠(3)に酷似し, No.4の(2)金川洞泉寺笠に相似する。軒端より1.0入って2弧輪郭を巻いて立つ。高さ19.0cm, 底辺19.0cm, 比率1.0。茨は弧の中央にくる。隅飾の1個と最上段の一部は昭和20年8月14日の土崎空襲の際, 爆弾の破片で欠失したという。

塔身, 相輪を欠失しているのは惜しまれる。8尺塔として造られたものであろう。

雲祥院は元来下新城岩城字下向, 岩城館の脚下にあったが明治5年現在地へ移転してきた。この宝篋印塔もそのときに運ばれてきたものであろう。

23. 秋田市寺内後城C地区 [第8図23]

塔身 一辺17.5cm, 四面に12.5cm四方の画線内に西hrih(弥陀)・vah(釈迦)・bhai(薬師)・sa(観音)の種子を刻む。東に位置していた大悲寺の本尊が聖観音であることからこれとの関連で, 薬師と観音の配置をかえたものと推定される。上面に奉籠孔をうがっている。安山岩。後城発掘調査で出土。(秋田市1981)

24. 秋田市寺内墓地 [第8図24]

笠 高さ13.6cm, 上6段, 上端一辺8.3cm, 下1段軒の厚さ3cm, 幅23cm, 隅飾は軒端より0.5cm入って立ち2弧で輪郭を巻く。高さ9.5cm, 下幅7.5cm, 凝灰岩製。

25. 秋田市寺内 [第8図25]

相輪 残欠高さ18.5cm, 伏鉢径11cm, 高さ7cm, 柄径4.5cm, 長さ4.8cm, 請花は高さ3cm複弁8葉, 九輪は四輪を残し, 長さ4.5cm, 青白色を呈する安山岩。

26. 秋田市旭北寺町東福寺 [第8図26]

塔身 縦長で高さ26cm, 幅19.7cm×19.5cm, 正面の上・右端が欠損しており, 火中した形跡が認められる。現存高18cmの舟形輪郭内に五葉の線刻蓮弁上に高さ15cm, 膝幅11.5cm, 定印の阿弥陀如来の坐像を陽刻する。背, 左, 右を線刻の長方形郭で囲み, 左にsa(観音)右にsah(勢至), 背にhrih(阿弥陀)種子を刻む。安山岩。

同寺の開山は伝えによると法然の命を受け陸奥を巡錫した石垣金光上人の随行文貞と称されている。雄勝郡増田地方の東福寺村はこの寺の故地³⁾といわれる。南北朝のころ兵乱をさけて現天王町の北野天神社の北西, 当福寺の元屋敷とよばれているところへ移り, 男鹿脇本の西光庵にいた浄空が安東氏の帰依をうけて同

寺へ入った。寺領北野天神八町四方を寄進された。文明5年(1473)三世岌念のとき現秋田市飯島穀丁に堂宇を移し、佐竹氏の久保田城下町形成とともに現在地へ三転したといわれている。

塔身は北野時代のもので寺移転とともに持ち運ばれ現在地においては境内の天神堂に祀られていた。

27. 山本郡琴丘町玉蔵寺〔第8図27〕

笠 高さ28.5cm, 上5段, 上端一辺18cm, 径11cm, 深さ7.5cmの円形柄孔がある。軒の厚さ3.5cm, 幅37.5cm, 下1段で高さ1.5cm, 一辺27.5cm, 塔身の上面に円形の低い突起がつくりつけられていたのであろうか、笠の底部中央にわずかな円形のくぼみが残る。2弧輪郭を巻く隅飾は軒端から2cm入って立つ。高さ11.5cm, 底辺11cm。茨は2段目の中間にくる。安山岩, この宝篋印塔は今のところ山本郡内で唯一のものである。

28. 北秋田郡下小阿仁村五反沢〔第8図28ab 第9図cd〕

基壇(1)厚さ10cm 1枚の切石よりなる2段式。下段幅53cm×51.5cm, 上段幅41cm×40cm。現状はこの上さらに厚さ11cmの1枚の切石よりなる壇がのっている。下段は高さ6.5cm, 幅40cm×38cm, 上段は高さ4.5cm, 幅34cm×31cmを測る。安山岩。

塔身(1)高さ21.5cm, 幅20cm, 南面に18cm×16cmの線刻郭内に頭光身光の光背を彫り, 5葉の単弁上に像高14cm, 膝幅9cmを測る定印の阿弥陀如来坐像を陽刻する。東にsa・西sah, 種子を方形線刻内に刻む。ただしsa種子は逆に彫られている。

笠(1) 高さ25.6cm, 上5段, 上端一辺13.5cm×13.0cm 径8cm, 深6.5cmの円筒形柄孔, 下1段一辺26.5cm, 軒の厚さ6cm, 上幅34cm, 下幅32cmでわずかに梯形を呈する。隅飾は2弧輪郭を巻き, 軒端より1.0cm入り, 高さ11.5cm, 底辺6.0cmで立つ。

基壇(3)高さ10cm, 2段式で下段高さ7cm, 一辺46cm 上段高さ3cm一辺38.5cm。

塔身(2)高さ18cm, 幅18.5cm, 四面に方形線刻をめぐらし内に四仏種子を刻む。

笠(2)高さ21cm, 4個の隅飾は欠損しているが, 上5段上端一辺14.5cm×14.0cm, 径10.5cm, 深さ5.5cmの円筒形柄孔がある。下1段一辺19cm, 軒の厚さ5cm, 推定幅25cmで笠(1)より小ぶりである。

同地上ノ山下の八幡神社前に北秋田郡内で数少ない

自然石利用の板碑が一基ある。高さ115cm, 幅41cm, 厚さ30cm, 全長40cmのvam種子を刻している。

29. 下小阿仁村中五反沢〔第9図29〕

基壇 厚さ10cm, 幅29cm×28cmの1枚石を四隅に高さ3.5cm, 幅9.5cmの脚を残し, 壇の厚さ6.5cmに加工している。

塔身 高さ18cm, 幅14.5cm×14.0cm, 縦長の塔身であるが, 磨滅して種子等は不明である。あるいは当初から種子は彫られていなかったのではないかとみられる。

笠 高さ16cm, 上5段, 上端一辺14cm, 径7cm, 深さ7cmの円形柄孔をはる。下1段で端より1.2cm入り高さ1.2cm, 一辺20.8cm×19.3cm, 軒の厚さ4cm, 上幅23.0cm, 下幅22cmで, 梯形をなす点, 1628上五反沢の笠(1)に類似する。隅飾は1弧素文にみえるが, 輪郭をわずかに残す。軒端より0.9cm入って立ち高さ4cm, 底辺5cm。

相輪 残欠が2片あり, 接合すれば高さ28cmの1個体をなすものとみられる。径11cm, 高さ5cmの素文の請花と九輪のうち六輪を刻む残欠は高さ16cm。単弁七葉を刻む。宝珠は高さ12cm。

基壇, その他, すべて安山岩である。

30. 北秋田郡合川町三里〔第9図30a, b第11図30〕

4基分が現存する。この宝篋印塔については明治30年代石川理紀之助は適産調の際『旧跡考』下小阿仁村の部の中で「五輪台の墓塔」と題しつぎのようにのべ, かつスケッチを添えている。



第2図 「旧跡考」の三里塔

「三里の西の山根なる畑中に有り。白津山正法院といひし寺跡なりと言伝ふ。白津山とは本山本郡界の山地といふ。高白津山ともいふ。」また図示して「此五輪台の石器なり。如此きもの四つあり。縦横とも八, 九寸」

基礎 反花付壇上積式、高さ27.5cm、複弁二葉に間弁入、磨滅しているが、隅複弁か。葛厚5.3cm、幅34.9cm、地覆厚5.0cm、端より0.3cm入って幅6.5cmの束を立てる。

塔身(1) 高さ18.5cm、幅20.5cm、16cm×17.5cm方形線刻の輪郭内にbhah種子、左の銘文未解読。

笠(1)高さ26.4cm、上5段、上端一辺15.8cm、10.5cmの円形孔をはる。下1段で高さ2.6cm、一辺29.5cm軒厚6.3cm、幅34.8cm、隅飾は2弧輪郭を巻き、軒端より0.5cm入って立つ。高さ8.5cm、底辺11.6cm、0.4cm外方に傾き、茨は2段の中間にくる。

相輪(1)九輪のうち七輪を残し、現高21.2cm、伏鉢径17.0cmで素面、請花は単弁8葉、宝珠高13.8cm。以上を一具として計測すれば総高93.1cm、3尺塔として作られたものであろう。

笠(2)高さ24.8cm、上5段上端一辺12.9cm、径9.3cmの円形納穴がある。下段は一段で高さ1.5cm、一辺26.5cm、軒の厚さ5.3cm、幅32.5cm、隅飾2弧で輪郭を巻き高さ8.5cm、底辺10cm、端より0.5cm入る。茨は2段の中間にくる。

相輪(2) 二輪を残す相輪は素面の伏鉢径15.8cm、請花は単弁8葉。

塔身(2) 高さ19.5cm、幅19.5cm、16.5cm×16cmの方形線刻の輪郭内にbhah種子、右の銘文は未解読。

笠(3) 高さ22cm、上5段で上端一辺12.3cm。柄孔径10.5cm、下1段で厚さ1.6cm、一辺24.5cm、軒の厚さ5cm、幅29cm、隅飾は軒端より1.2cm入る。高さ8.3cm底辺9.5cm、茨の位置は軒上端より左6cm、右5.0cmで不均衡、相輪(3)五輪は径9.5cm、高さ8cm。

塔身(3) 高さ19cm、幅19cm、16cm×16.5cm方形線刻の輪郭内にbhah種子、左の銘文は未解読。

笠(4) 高さ19.3cm、上5段上端一辺、12cm、柄孔径8.4cm、下段1段で高さ0.9cm、一辺22.5cm、軒の厚さ3.7cm、幅28cm、隅飾は2弧で輪郭を巻き高さ8.4cm、底辺9.4cm軒端より1.2cm入って立つ。茨は2段目中間にくる。

相輪(4) 現存高16cm、伏鉢径11.0cm、請花8弁で径13cm。上記の石質はすべて安山岩である。

31. 大曲市藤木八幡神社〔第10図31〕

塔身 これについては本誌第2号(1977)に記載してあるが要点を再掲する。高さ19.8cm、幅22cm、厚さ

20.3cm、正面に深さ2.2cm、堅12cm、横11.8cmの舟形輪郭内に高さ9.8cmの阿弥陀如来の坐像を半肉彫の蓮弁上に陽刻する。左右の側面は輪郭線内にsa・sah種字を彫る。右側に「□奉造立石塔二親□」左に「嘉暦三九月」と彫る。

32. 雄勝郡稲川町広沢寺〔第10図32a.b.c〕

寄せ集め塔であるが小野寺氏の供養塔と伝えられている。下から3, 5, 6が一具のものであろう。最下層は後補の基壇であろうか。

基礎 3段目で総高24.5cm、幅36.5cm、高さ4cmを2段につくり、上端一辺29cm、側面は輪郭をもって2区に分つ。15cm×10cmの区画内に

文明

三年七月

七日 □□敬白

と判読される。

塔身 高さ21cm、幅21cm、vam種字を刻む。

笠は欠失部分が多いが残存高21cm、軒幅34cm、段は磨滅しているが、6段か。上端は欠損して不明、下2段隅飾も磨滅しているが2弧で輪郭をまくものであろう。

II 宝篋印塔各部についての所見

八郎瀧周辺と一部県南の事例を加え宝篋印塔各部の概要を記載した。その要点を整理、一括したのが表1である。つぎにこれらをもとに各部についての所見のべる。

1. 基壇 宝篋印塔の基礎の下に基壇を設けるのは関東においては基礎と不可分であるが、後述するように当地域のごとき関西形式圏にあっては装飾的なものにすぎない。(川勝1957)

当地域で基壇を伴う確実な例はNo.22雲祥院塔とNo.28, 29上小阿仁の4基である。

雲祥院塔の基壇には反花が刻出されているが、基礎の反花と対比したとき、製作年代もしくは工人が異なるのではないかと思われるほど粗略な造作である。これは、しかし技術の稚拙によるものというより、むしろ製作経費の節減による簡略化であろう。そして特殊な流紋岩を用いていることから基礎、笠部と一具をなし南北朝時代前期の作であろうと推定する。

基壇に反花を刻出する例は大和薬師寺の建治4年(1278)在銘を最古とし、同地域を中心に広く近畿圏に普

磯村朝次郎

表1 宝篋印塔各部の整理表

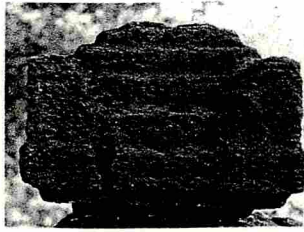
No.	所在地	基礎			塔身			笠					相輪	石質	推定年代											
		形態	側面寸法	比率	形態	寸法 高さ×幅	比率	上	下	隅	隅寸法	比率				高・幅	比率									
1	男鹿市門前 (1)	C	20×33	1.65	種	18×20	1.11	5	2	2	10×10.5	0.95	28×33.5	1.2	S	南北朝										
	〃 門前 (2)	C	21.5×33	1.53							(2)	5	2	2	10.8×11.2	0.96	26.5×32.5	1.2	S	室町初						
	〃 門前										(3)	5	2	2	不明				R	南北朝						
	〃 門前										(4)	6	2	2	不明				T	〃						
2	〃 椿	C	27.8×34	1.22	種	21×22	1.04	5	2	2	13.5×12.5	1.08	27×36	1.33	A	室町前										
3	〃 女川	A	29×36	1.24	種	13.5×18	1.33	5	1	2	8.0×9.0	0.88	26×29.5	1.13	A	室町中										
4	〃 金川										5	1	2	12.0×11.0	0.9	29.5×35.5	1.20	0	A	〃						
5	〃 大倉	C	29.5×35.5	1.20										5	1	2	23×38	1.65	S	南北朝						
6	〃 飯森				種	13.5×18	1.33	5	1	2	8.0×9.0	0.88	26×29.5	1.13	A	室町中										
7	〃 飯森													5	1	2	23×38	1.65	S	南北朝						
8	〃 飯森	C	16×28	1.75										5	1	2	8.0×9.0	0.88	26×29.5	1.13	A	室町中				
9	〃 浦田	C	19.5×31.5	1.61	種	13.5×18	1.33	0	5	1	2	-	-	18.8×31	1.64	S	室町後									
	〃 浦田																0	5	1	2	8×9	1.0	20.5×30	1.46	S	南北朝
	〃 浦田																0	5	1	2	8×9	1.0	20.5×30	1.46	S	〃
10	〃 樽沢																5	1	2	8×9	0.88	20.3×29.3	1.44	A	室町	
11	〃 脇本							5	2	1	4×5.5	0.72	16.9×23.5	1.40	T	室町後期										
12	若美町小深見	C	20×29	1.45	種	31×27.5	0.88	5	1	2	9×10.5	0.85	30×36.5	1.21	A	〃										
13	〃 福川 ①	C	28×33.5	1.20																				A	室町前期	
	〃 福川 ②	C	27.5×36	1.30																				A	〃	
14	〃 福米沢	C	21×31	1.42	種	22×18	0.81	5	1	2	11.5×11	1.04	22×33	1.50	A	〃										
15	八郎潟町浦大町	C	25×31	1.24	種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	〃									
16	〃	C	28.5×37	1.31																				0	A	室町中期
	〃																							0	D	室町中期
17	五城市町 町村	B	19.2×31	1.61	種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	〃									
18	昭和町 豊川	C	20×26	1.30																					A	室町後期
19	〃																								S	南北朝
20	秋田市 中野				種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	〃									
21	〃 岩城				種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	〃									
22	〃 穀丁	B	28.6×36.8	1.28											A	室町前期										
23	〃 寺内				種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	室町後期									
24	〃 寺内				種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	〃									
25	〃 寺内				種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	〃									
26	〃 寺町				種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	〃									
27	琴丘町 鯉川				種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	室町前期									
28	上小阿村五反沢				種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	室町前期									
	〃				種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	室町前期									
29	〃				種	17×17	1.00	6	1	2	7.0×8.0	0.8	13.6×23	1.69	0	A	室町前期									
30	合川町 三里	C	23.2×34.9	1.50	種	18.5×20.5	1.10	5	1	2	8.5×11.6	0.72	26.4×34.8	1.31	A	室町中期										
	〃				種	18.5×20.5	1.10	5	1	2	8.5×11.6	0.72	26.4×34.8	1.31	A	〃										
	〃				種	18.5×20.5	1.10	5	1	2	8.5×11.6	0.72	26.4×34.8	1.31	A	〃										
	〃				種	18.5×20.5	1.10	5	1	2	8.5×11.6	0.72	26.4×34.8	1.31	A	〃										
31	大曲市 藤木				種	18.5×20.5	1.10	5	1	2	8.5×11.6	0.72	26.4×34.8	1.31	A	〃										
32	稲川町	D	24.5×36.5		種	21×21	0.9	6	?	?			21×34		R	嘉暦4年										

備考 基礎・反花, 輪郭付格狭間① 反花, 壇上積格狭間② 反花, 壇上積③ 輪郭2区④
石質 砂岩(S) 流紋岩(R) 凝灰岩(T) 安山岩(A) 石英安山岩(D)

秋田県における中世宝篋印塔の型式と分布



1 a 男鹿門前基礎(1)



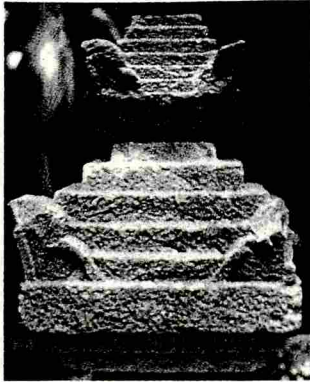
c 門前笠(1)



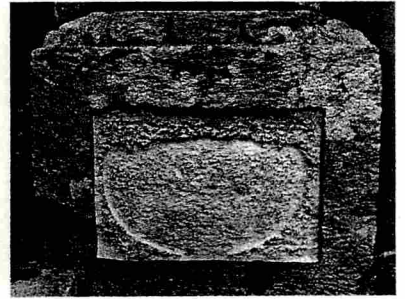
d 門前笠(2)



b 門前基礎(2)



E 門前笠(3)(4)



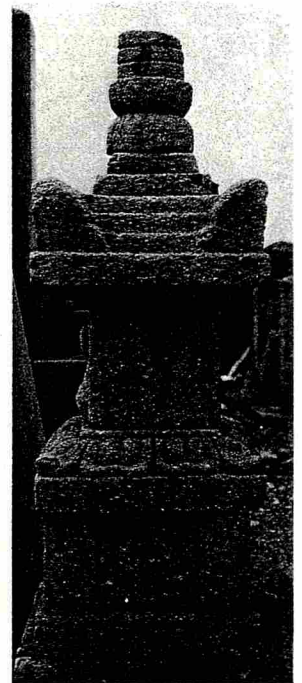
3. 女川地藏院



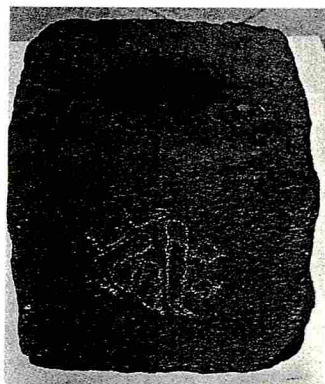
2. 椿墓地(左面)



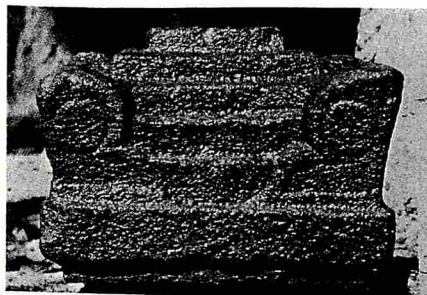
(正面)



(右面)



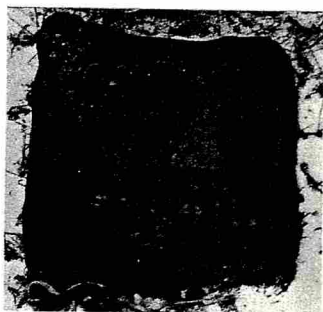
4a 金川洞泉寺塔身



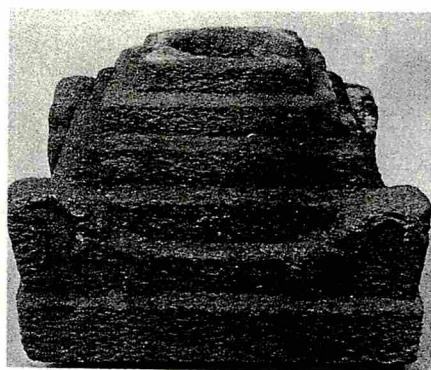
b 金川洞泉寺笠



5. 大倉



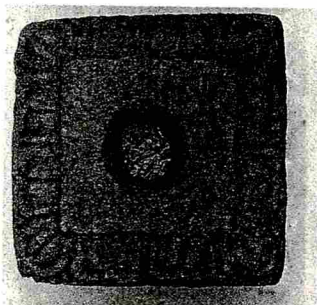
6. 飯森



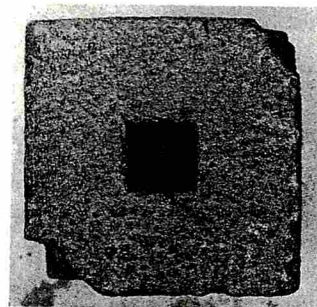
7. 飯森



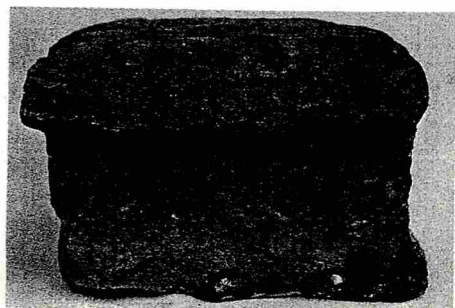
8. a 飯森



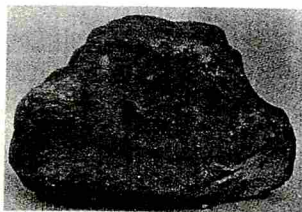
b. 同左基礎平面



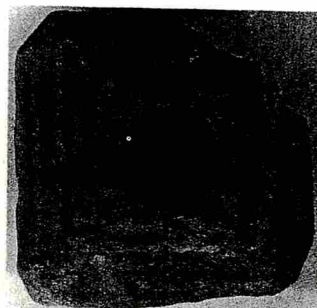
c. 同左底面



9a 浦田宗泉寺基礎



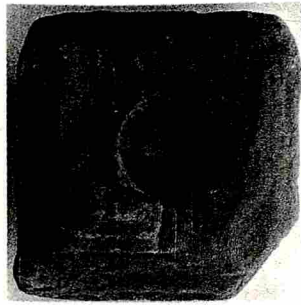
b. 浦田宗泉寺笠(1)



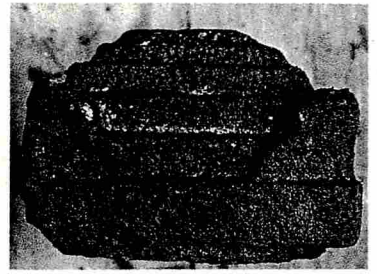
同左平面



9c 浦田宗泉寺笠(2)



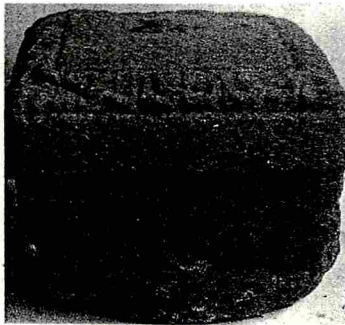
同左平面



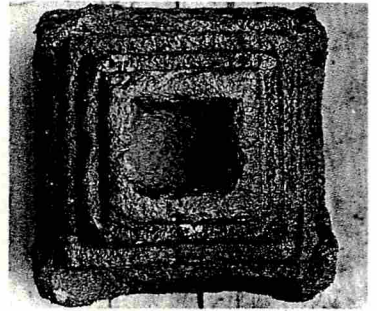
10. 樽沢十王堂



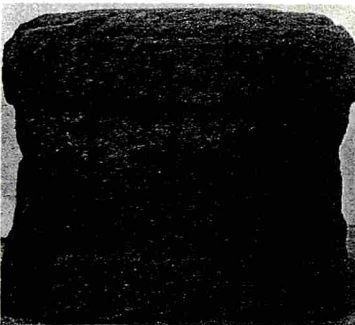
11. 脇本万境寺



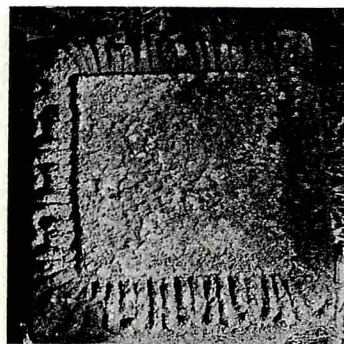
12. 小深見峰玄院



同上樽沢十王堂(平面)



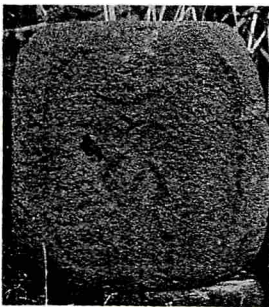
13a 福川福昌寺基礎(1)



同左平面



b. 福昌寺基礎(2)と笠



c. 福昌寺塔身





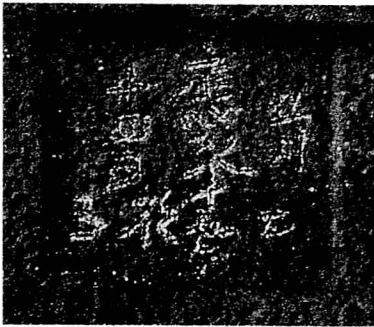
14. 福米沢墓地



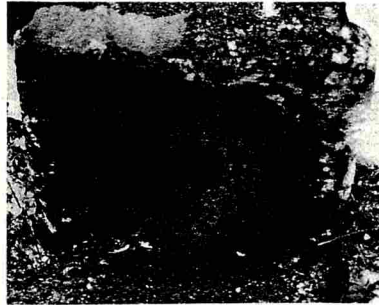
15. 浦大町善知鳥



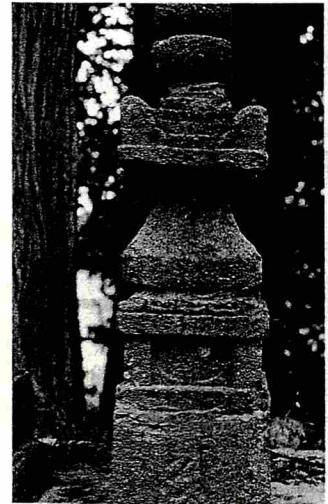
16a 浦大町常福寺



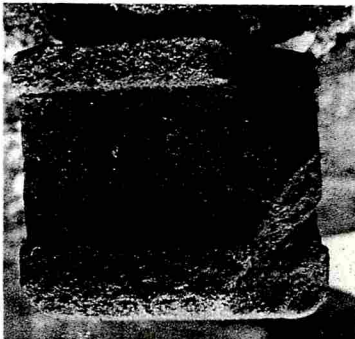
b. 浦大町常福寺基礎の銘文



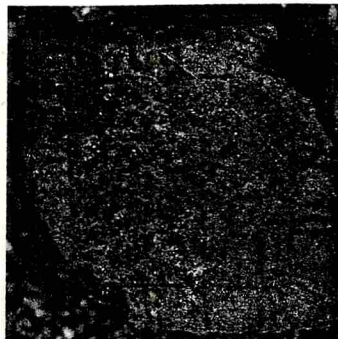
c. 常福寺基礎底部



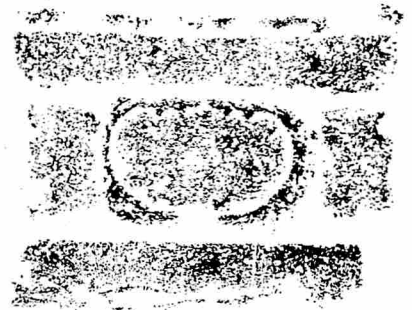
17. 町村広徳寺



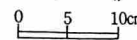
18. 豊川船橋

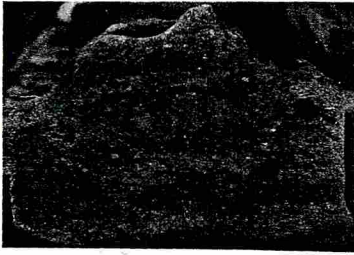


同左平面

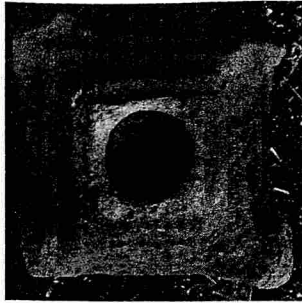


同上拓影





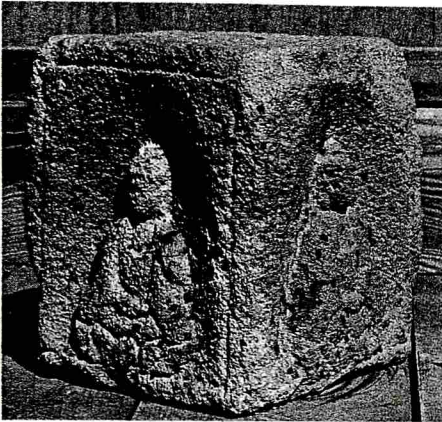
19. 豊川船橋



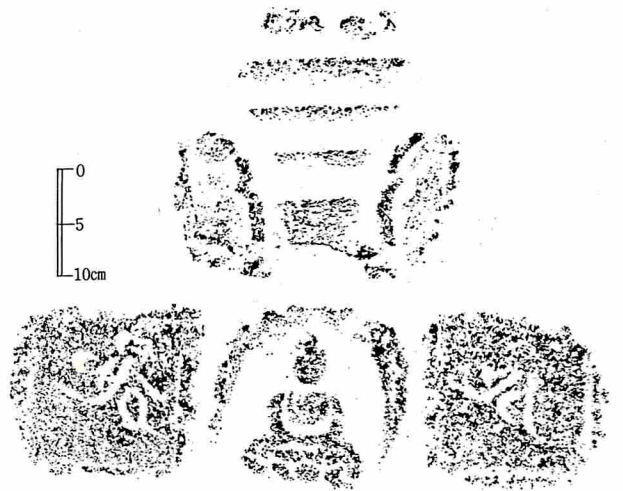
同左平面



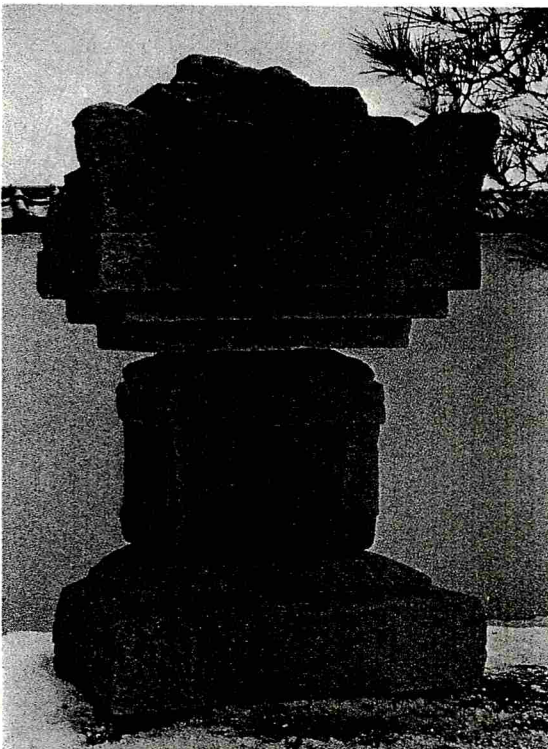
20. 下新城野羽黒神社



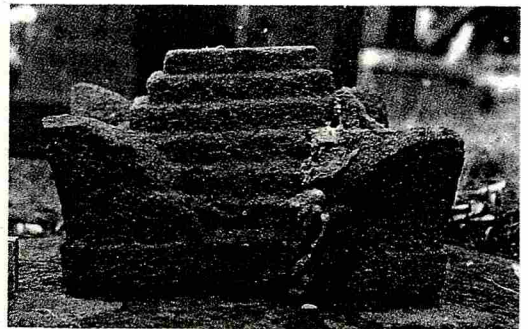
21. 下新城



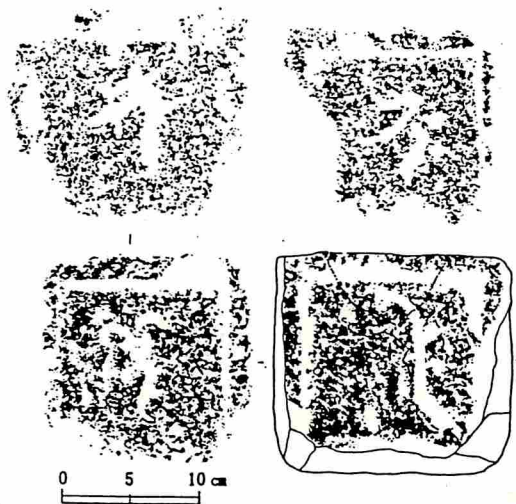
中野羽黒神社拓影



22. 飯島穀丁雲祥院



24. 寺内墓地



23. 寺内後城 c 地区拓影
(『後城発掘調査報告書』)



26. 秋田寺町東福寺

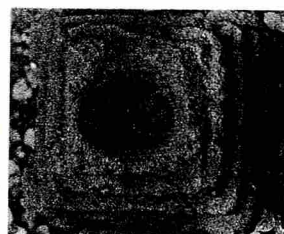


0 5 10cm

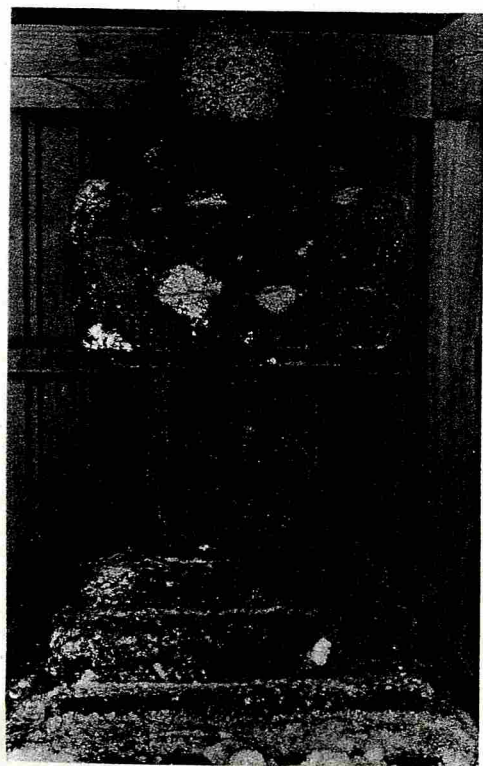
同左拓影



25. 寺内



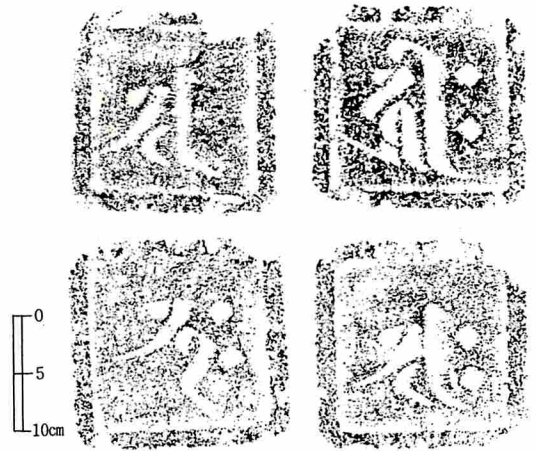
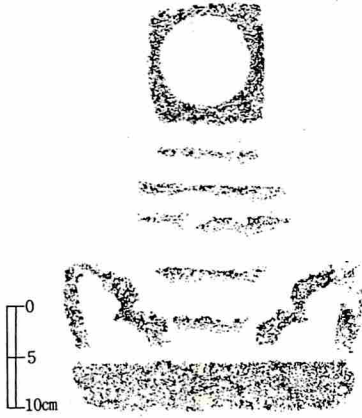
27. 琴丘玉蔵寺



28a 上小阿仁五反沢(1)

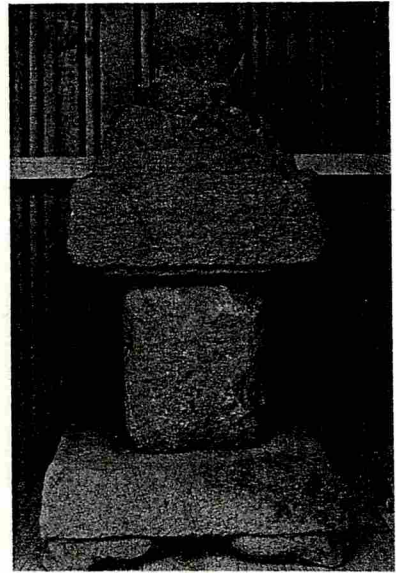


b. 上小阿仁五反沢(2)



c. 上小阿仁五反沢(1)拓影

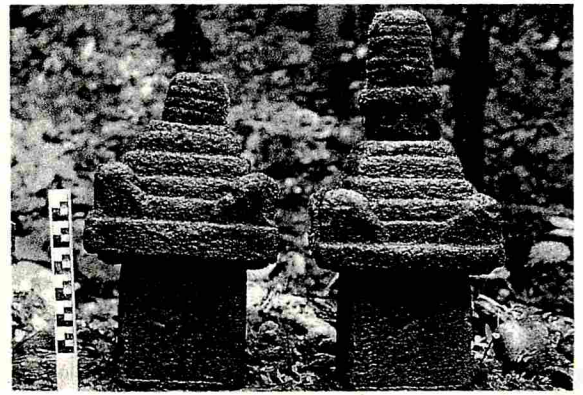
d. 上小阿仁五反沢(2)塔身拓影



29. 上小阿仁中五反沢



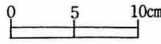
30a 合川三里



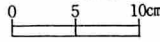
b. 合川三里



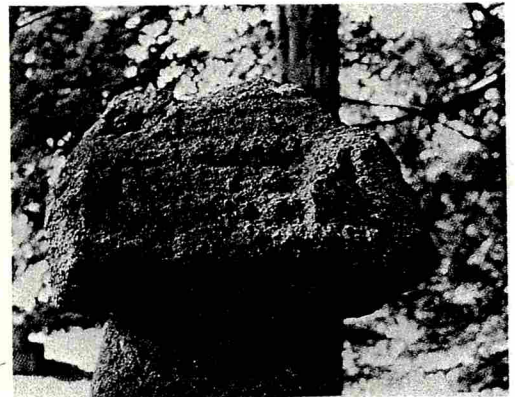
30. 合川三里塔身拓影



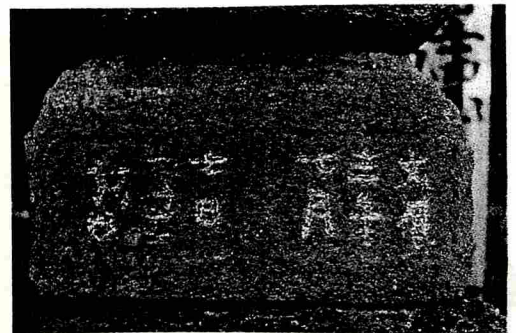
31. 大曲藤木八幡拓影



32a 稻川広沢寺



b 広沢寺笠



c 広沢寺基礎

遍化したものである(田岡1976)が、秋田地域においてもその存在が認められるという意義は閑却できないものがある。恐らくは中世宝篋印塔の反花式基壇分布の北限をなすものではないかと考えられる。さらにこのことは八郎瀧周辺における宝篋印塔の系譜をたどる上で有力な契機にもなるのではなかろうか。

一枚石の切石からなる上小阿仁村下五反沢の基壇はいずれも反花を持たず、段形2段に造り簡略化された形式である。現状で二つ重ねにされているNo.28の2個は元来別々のもので、このことから3基の宝篋印塔が存在したのではなかったろうか。現存する2基は基礎を失っているが、笠の軒幅から推測して、それぞれの基壇と均衡を保ち、かつ安山岩製であることから、後補、転用ではなく当初のものであろう。

中五反沢塔の基壇は雲肘木形の隅足を刻出し、きわめて小型の部類のものである。笠部の形式からして下五反沢塔より後発の室町時代後期のものであろう。

2. 基礎 宝篋印塔の原初形式は暦仁2年(1239)の高山寺塔とされ、正元元年(1259)大和興山塔、建治4年(1278)山口薬師寺塔などの遺品を通じて形式的変遷をたどることができる。(川勝1971)このような形式変遷観に基づいて当地方の基礎を検証してみると側面高に対する幅の比率が2.0以上のものは皆無である。まずこの点からしても鎌倉中期以前にさかのぼる古式の遺品は存在しないといつてよいであろう。No.31大曲市藤木八幡社塔は基礎を亡失しているが、塔身に嘉暦4年(1329)の銘があり、残欠であるがこれが秋田地方における最古の宝篋印塔とみなされる。

既述のように当地方の基礎の形式は三種に分類できる。(1)反花、輪郭付格狭間入 (2)反花付、壇上積式格狭間入 (3)反花付、壇上積式である。

(1)は今のところ女川地藏院塔1例のみである。反花は複弁三葉で彫りが浅く、側面の高さに対する幅の比率は1.24、格狭間の脚幅は5cmとやや狭いことなどから鎌倉時代後期後半ころと推定される。

基礎上端の構造は初現形式は二段式であり、反花が後に造りはじめられ、現在、奈良県高市郡高取町観音院にある弘長3年(1263)在銘塔が最古の資料である。また側面は切放し素面が本格、古式で、輪郭付格狭間入は滋賀県浅井町大吉寺跡の建長3年(1251)や信濃津金寺の嘉祿2年(1226)宝塔も同式で、鎌倉中期後

半、畿内及びその周辺に発生した(田岡1976)ものと考えられる。

反花付、壇上積式、格狭間入は2例ある。壇上積とは地覆石の上に束石をたて、その間に羽目石を入れ、上に葛石を置く壇築法をいう。この式のものには輪郭付格狭間入より、複雑であり、それだけに経費もかさんだことであろう。No.22雲祥院塔は側面高に対する幅の比率は1.28で女川地藏院塔に近似し、室町時代前期ごろの数値を示していると思われるが、隅飾は外傾するものの1.0で定形化、格狭間の張り、脚間の寸法等から南北朝前期ごろと推定したい。No.17広徳寺塔はこれに対し側面高と幅の比率が1.36 隅飾りは1.1とはほぼ定形化した時期の数値を示していると思われるが格狭間の脚間が狭く、南北朝後期ごろであろう。

この形式の石質は流紋岩、石英安山岩で、輝石安山岩製のものは1例もないのは注目すべきことと思われる。流紋岩製の門前永禪院亡失塔の笠と一具をなした基礎はいかなる形式のものであったのか知るすべはないが、同石質の利用が鎌倉後期以降、南北朝期に限られるらしい形跡があり、恐らく格狭間入ではなかったかと推測する。

当地方の最も普遍的な基礎の形式は壇上積みにつくり、上端を反花とする類である。格狭間を入れず素面とするこの基礎の造作は土工技術の後進性を示すものではなく塔発注者の経済的水準を反映したものであろう。この形式の基礎の年代について今回ようやく「応永15年(1408)」銘を検出できた。このことは他の同形式の基礎の年代を推定する基準資料として役立つであろう。また、この形式の基礎は輝石安山岩、石英安山岩、砂岩をもって占められており、前記形式(1)とあわせ石材の選択に時代性が反映しているものと推解される。

ちなみに形式(3)の8例につき側面高と幅の比率をみると大倉が1.20で方形に近く室町後期頃を示すが、逆に飯森は1.75ときわめて古式のようなものである。しかし、これはむしろ室町期以降の退化形式を表わした数値とみるべきであろう。平均値の1.42は室町期におさまる。

つぎに基礎の細部についてふれると特殊な飯森塔がある。塔身受けに円筒形の奉籠孔をうがち、さらに底部に方形孔を有するものである。円筒孔は塔身底部に柵をつくり挿入安定させるための柵孔と考えられるが

底部の方形孔の目的は何であろうか。元来、この基礎には中央に柵を有する基壇があり、それに挿入するための柵孔であろうか。No.16常福寺塔の底部には伏鉢状のほり込みがある。これは基壇の凸部を受けるものではなく基礎の下に置かれた埋納物等を保護する目的とも考えられるが、今後、比較資料を得て考えたい。

反花についていえば復弁1葉が1例で、2葉が3例、その他はすべて3葉で、当地域の一つの傾向と認めることができるかも知れない。

基礎を反花と葛、束と地覆を別石につくる椿墓地塔は異例である。類例は能登穴水町来迎寺塔、明泉寺塔にある（藤原1934）が、今のところその機能的意味は確定を得ない。

基礎を後世再加工した例がNo.15浦大町善知鳥にあるがこれも当地方においては珍しい例である。

3. 塔身 発願、造立者の信仰を表徴する塔身の残存は18例である。このうち不明の3例をのぞくと次の5種となる。

表2 塔身の分類

種子(1)	種子(4)	種子(2)像	種子(3)像	像 (3)
5	4	4	1	1

種子、像容は方形の輪郭線で囲むものが多く、定印の弥陀如来の坐像陽刻は5例、釈迦1例である。これらはすべて舟形の輪郭内に刻出されているが、No.28上小阿仁五反沢塔はさらに頭光身光の光背を線刻する。塔身に刻出された像容は鎌倉後期、室町前期と推定される五輪塔、板碑の像容モチーフに相通ずるものがある。第12図は塔身に刻出された像容を石質別に五輪塔板碑のそれと対比するため集成したものである。

このうち絶対年代の判明しているのは藤木八幡塔で、流紋岩製五輪塔は相対的年代観であるが鎌倉後期、南北朝前期。石英安山岩製板碑は南北朝前期前半。安山岩製板碑は室町前期で下限は応永20年（1400代）頃の製作と考えられる。

塔身の像容は板碑に比して彫りこまれる面積も狭く安山岩製のものの中には火中したり、風化の進んでいるものもあるが、藤木の嘉厩塔と鎌倉後期と推定される浦田、船越、町田の水輪の像容を比較してみる。水輪の蓮弁刻出は平板的であるが、衲衣、膝端の表現にはこれら四例が全く別系統のものとして判断するに困難な同工異曲の技法を窺取できないだろうか。

4. 笠 笠部の段数は上6段、下2段、隅飾は1弧素

面が原初形式である。これに対し当地方の場合28例中、磨耗して不明のものを除き上5段が圧倒的に多く22例6段は寺内と門前（今亡）の凝灰岩製である。下段については1段が16例、2段が8例である。ただし1段の中には高さわずか0.5cmというように、段と認めてよいかどうかと思われるものも若干含まれている。石質と上段の関係でいうと地元産石使用のものはすべて5段である。この点は注意されてよいであろう。上端の相輪柵を入れる穴は円筒形柵孔であるが、方形孔が樽沢に1例あり、五輪塔火輪上端のそれにもみることがある。

隅飾の形態は1弧素面はNo.11脇本のみで、ほかはすべて2弧、輪郭を巻いている。そのうちただ一例No.4金川洞泉寺塔は上弧内に月輪を浮彫し、輪郭線が底辺にまで及ぶ。鋭利な茨の形態は飯島穀丁の笠にもみることが出来る。

塔身に刻出された像容と種子、四方仏種子はつぎのように解される。（斎藤1986）

No.13・若美町福昌寺の四仏種子は東hum（阿閼如来）南trāh（宝生如来）、西hrih（阿弥陀如来）、北vam（金・大日如来）の金剛界四仏。通常金剛界五仏は中央（大日）、東（阿閼）、南（宝生）、西（弥陀）、北（不空成就）であるが、福昌寺塔は一不空成就仏の代りにva ni（大日如来）を配したものと推定される。

同種子同配置例は大阪府池田市貞和4年（1360）刻銘の宝篋印塔塔身にみられ、滋賀県八日市多聞院の推定南北朝期宝篋印塔塔身にもみられる。（斎藤1957）

No.20 秋田市中野塔は東bhai（薬師）、西sa（弥陀）で南は釈迦坐像と推定される。sa種子は観音の場合が多いが、弥陀種子の例もある。

No.26 秋田市東福寺塔の東sa（観音）、南（弥陀坐像）、西sah（勢至）であるが、北hrihは何を意図して表現されたかはいくつかの推測が可能である。有力と考えられるのは「蓮華」・「浄土・極楽世界」・「弥陀」等であろう。（斎藤1980）

No.28 上小阿仁五反沢塔の弥陀三尊種子の背面のbhah種子は釈迦如来、菩提場径その他の種子字に対応されるが、この際、釈迦種子字と推定される。釈迦は弥陀經典の口説者とされていた。

隅飾の高さの幅に対する比率はNo.20羽黒神社塔の1.47は馬耳状をなし古式にみえるが、高さ、幅、段型の作出

塔身の関係から退化形式を示し室町期であろう。

5. 相輪

相輪の全体を知ることのできるのは安山岩の合川町三里、宝珠を欠くが同石質の大倉寺沢、石英安山岩では椿、常福寺がある。いずれも九輪は線刻、伏鉢、請花等、簡略化が著しい。ただ1例、寺内の残欠は伏鉢は円筒型をなし、請花は複弁8葉、石質は青色を帯びた安山岩で当地方の宝篋印塔、五輪塔などに多用される輝石安山岩、石英安山岩とは異なる。相輪の形式とあわせ他地域からの搬入であるように思われる。

Ⅲ 考察と課題

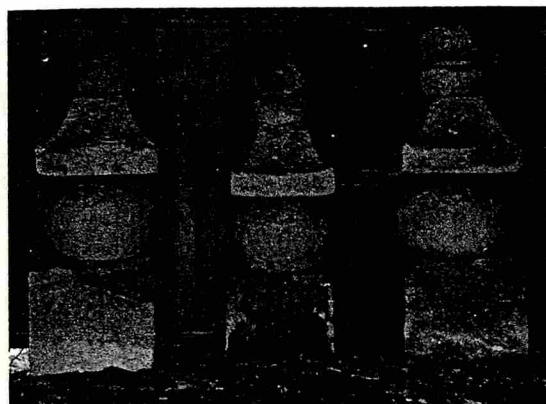
宝篋印塔各部の特徴をふまえさらに若干の考察を加え、今後の課題にもふれてみたい。

まず、分布状況は第13図によって一目瞭然である。すなわち①男鹿半島南岸から、寒風山東麓域、②秋田市北部、湖東域 ③能代、山本地域。男鹿半島北部域には今のところ当該遺品は見当らない。①～③の分布域は第16図をみれば分るように中世五輪塔の分布及び当代の安東氏支配領域にほぼ重なる状況を示す。これを石質からみた場合どのような動態として復元できるか。

八郎瀧周辺の宝篋印塔の石材はほとんどが地元産石であり、この点でも五輪塔と軌を一にする。その産石地を特定すれば流紋岩は男鹿半島西岸加茂、砂岩は推定であるが男鹿北岸湯の尻、黒崎海岸の露頭。安山岩は寒風山の東麓、石英安山岩は森山火山岩類で森山、高岳山南麓からの採石加工になるものとみなして大過ないものと考えられる。産地をこのように押えることができれば分布の軌跡は自ら明らかであろう。石英安山岩製の椿塔は湖東部から男鹿へ運ばれた唯一の宝篋印塔で、同年代とみられる若美町鶏木、道村の同石質の五輪塔水・火輪各1個体を入れても3例である。また湖東部においても石英安山岩製の宝篋印塔は4基分にとどまる。

これに対し男鹿部から米代川流域、湖東、雄物川流域への進出は板碑、五輪塔とともに著しいものがある。

流紋岩製の嘉暦4年(1329)在銘塔は男鹿半島加茂から雄物川を舟航して大曲市藤木に伝存し、いまのところ県内で最も遠隔に運ばれた事例である。同石質の元享3年(1323)在銘の五輪塔の地輪は同市八幡神社に五重層塔の塔身として転用されており、また西仙北



第11図 ニッ井高岩山の五輪塔

町大沢郷宿にある像容陽刻の五輪塔2基分や、当初、岩城にあった県内最大の優塔である飯島穀丁塔など、雄物川河口部、上流域から同石質の石造遺物に対する需要が目立つ。〔第15図〕

流紋岩製の石造遺物はニッ井町高岩山にも伝存している。五輪塔3基がそれである。〔第11図〕雄物川流域に見いだされるものと同じく、鎌倉時代後期に恐らく米代川を通じてもたらされたものであろう。

米代川流域から宝篋印塔の需要があるのは室町時代に入ってからのもので、合川町三里、小阿仁村五反沢塔の隔離分布によって知られる。これらはいずれも男鹿寒風山東麓域で製作され、米代川を舟航⁴⁾したものであろう。

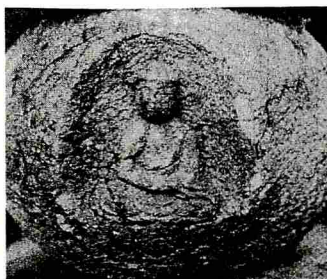
流紋岩の中世五輪塔は北は安東氏の本拠地であった青森県西津軽郡市浦村十三、南は山形県鶴岡市加茂に運ばれ、他の中世石造遺物と共存していることがわかっているが、(磯村1977)宝篋印塔についてはいまのところ秋田県域外へ進出しているかどうかは確認できていない。

安山岩製宝篋印塔は製作地域と推定される男鹿半島東部はいまでもないが、秋田市の北部、湖東にやや偏在している。この地域はまた安山岩製頭部方錐形板碑の集中域にもなっており、ことに福米沢、五反沢、東福寺、岩城神社塔の像容は板碑に刻出された像容に酷似する点のあることはすでにみたところである。

今回、浦大町に応永15年(1408)銘が検出された。天王出戸の方錐形板碑には応永20年(1413)紀年が知られている。したがって両者は寒風山東麓において室町前期にほぼ並行して製作されていたものとみて差し



大沢郷五輪塔



男鹿中五輪台五輪塔



船越五輪塔



浦田坂ノ上五輪塔



大曲藤木八幡宝篋印塔



同上拓影



福米沢宝篋印塔



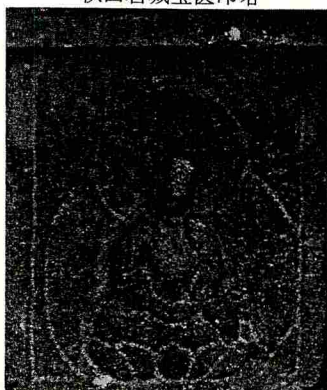
秋田岩城宝篋印塔



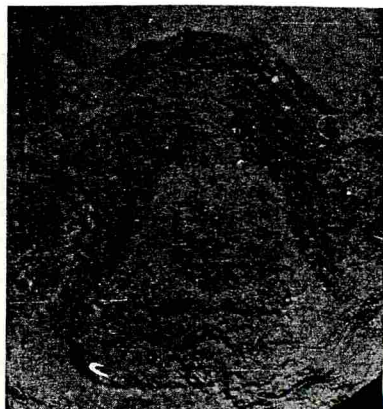
昭和豊川板碑



秋田金足片田板碑

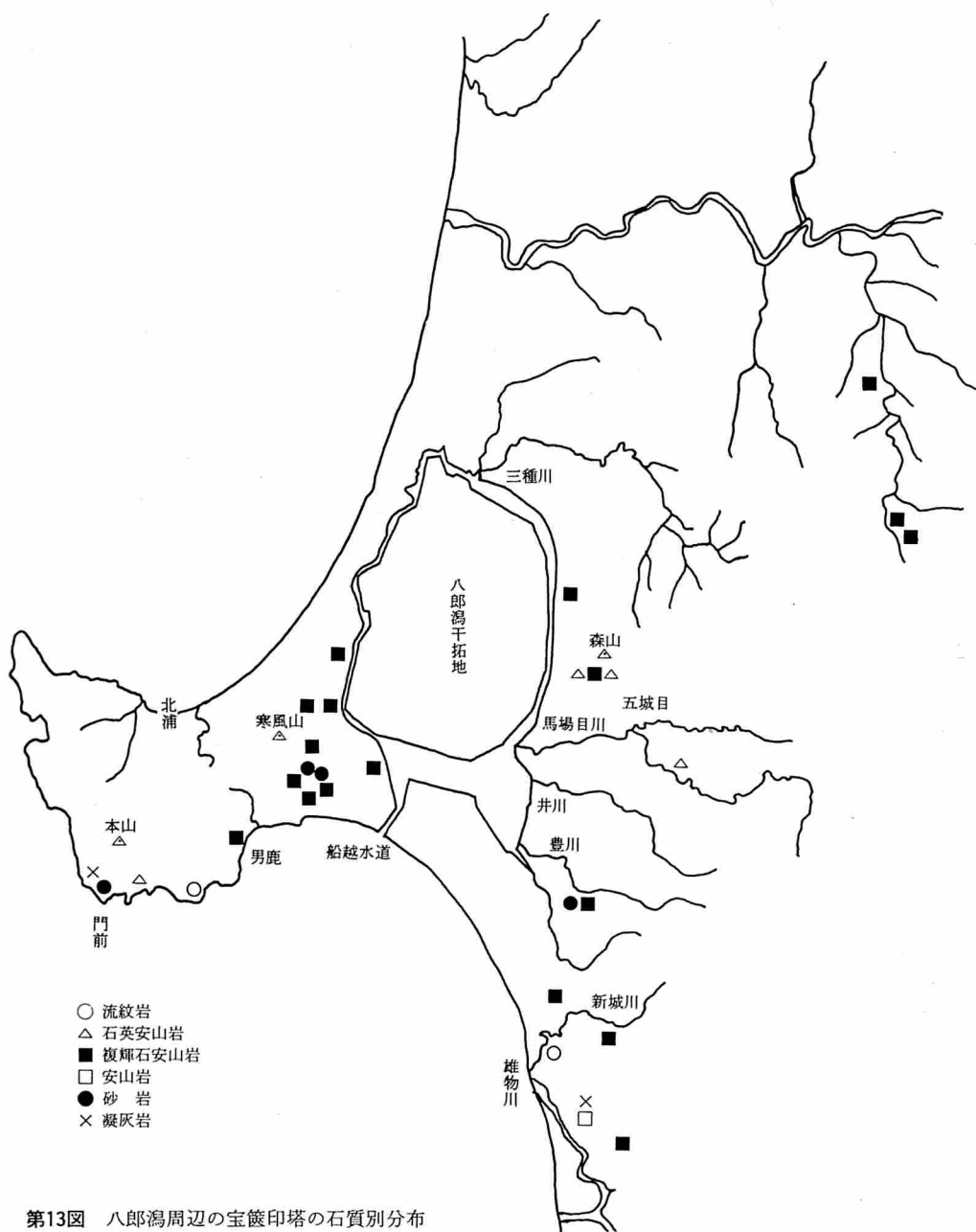


上小阿仁五反沢宝篋印塔



秋田東福寺宝篋印塔

第12図 宝篋印塔に刻出された像容と板碑、五輪塔像容の比較



第13図 八郎潟周辺の宝篋印塔の石質別分布

支えないであろう。安山岩製宝篋印塔は応永15年在銘塔を基準資料にし、形式、各部の計測値を勘案した場合、南北朝期にまでさかのぼるものはなく、すべて室町期に属するものでなかろうかと推解される。

砂岩製は5例。そのうち4例は男鹿、1例は昭和町豊川にあるが、これは男鹿からの持ちこみであろう。

男鹿黒崎宝田寺五輪塔群、大倉の五輪塔、船川比詰、女川所在板碑と同石質で石灰分を含む湯尻海岸の砂岩と考えられる。砂岩製宝篋印塔は磨耗甚だしく門前塔のはかは形態をよく把握できない。したがって製作年代も判然し得ないが、門前塔の基礎の比率1.62, 0.95, 0.96という笠部の計測値は少なくとも南北朝期後半を

下らないことを示すであろう。このことは同じ湯尻から採石加工したと考えられる比詰、女川の砂岩製板碑に刻出された種子の雄大感は、南北朝紀年を有する八郎瀉周辺板碑群のそれと対比し、同年代を指示する。〔第14図参照〕

ここで宝篋印塔の製作に供された4種類の石材の使用年代を概括すれば流紋岩は鎌倉時代後期から南北朝期、石英安山岩は南北朝期、安山岩は一部南北朝期に及ぶものもあるかも知れないが、大部分室町期、砂岩は南北朝期と推定される。

明らかに地元産石と判別される宝篋印塔のほかにも異質のものがNo.1門前（今亡）、No.11脇本、No.24寺内No.25寺内にあった。No.1門前、No.24寺内は上6段、2弧輪郭を巻き門前は室町期後半、寺内は室町中期、No.11脇本は上5段、1弧素文で室町後期前半と推定される。石質は凝灰岩であるから秋田産であってもおかしくはないのであるが、笠の段形は脇本は5段であるが他は6段で石質や形式的にも地元産とする要素に乏しく、海岸河口に立地している門前、脇本といい寺内のそれはもちろんのこと海路移入された疑いが持たれる。No.25の相輪は安山岩であるが請花の複弁8葉には地元産の簡略化した相輪とは比較にならぬ洗練された技法が認められ、上記の笠と同様、移入塔の残欠とみられる。県内に類似は今のところ見当らず、管見ではあるが津軽十三の小型宝篋印塔基礎の残欠には複弁の刻法、石質が酷似しており、今後、精査を必要とする。

以上、八郎瀉周辺に所在する宝篋印塔は五輪塔の分布と合せ、産石地を核として石造文化圏の設定を可能にする要素をもった遺品として認識されよう。

すなわち小結すると、加茂流紋岩製は雄物川上流、米代川中流、津軽十三、庄内加茂の遠隔地を志向し、安山岩製は寒風山東麓から湖東を覆う。石英安山岩は男鹿へ一部入りこむが板碑、五輪塔とともに湖東域にとどまる傾向を示し、その間を砂岩製の動きがみられるが、石質脆弱のためか遺存例少なく、室町中期以後は移入塔の介在をみる。

いうまでもなく、八郎瀉周辺に設定されるこの石造文化圏は鎌倉時代後期以後、産石地に定着していたであろう石工と造塔の発願者層によって形成されたものであることはいうまでもない。しかし造塔形式はこの地において独自に胚胎し、展開したものでないことも

またいうまでもない。たしかに塔の大部分は地元産石をもって製作されていることは寸分も疑う余地はないのであるが、既述のごとくその形式は巨視的に従来いわれてきている関西形式の範疇を全く逸脱するものではないからである。

宝篋印塔の関西形式とは例えば既述の飯島穀丁塔のように基礎の下に反花座を設けることもあるがこれは必須のものでなく、基礎が塔の土台となり、その上に塔身、笠、相輪をのせる。塔身に重厚の感があり、安定してみえるのが立面の特徴である。(川勝1957)

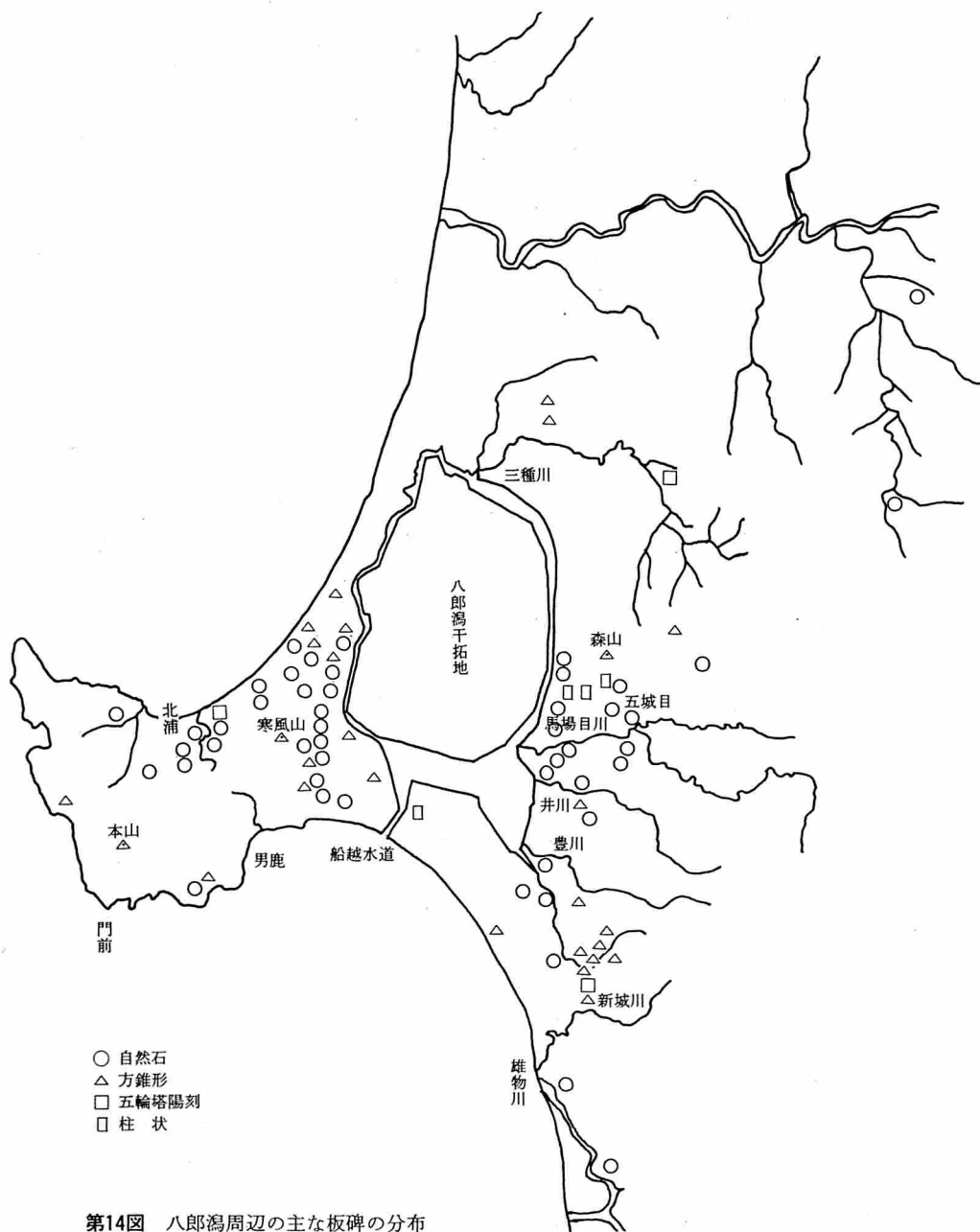
上小阿仁五反沢の3基は塔身を直接基壇にのせているが、No.30合川町三里塔のごとき壇上積の基礎が当初は存在したものであったろうことは既述した。

ここでは塔各部の特徴を指標とし、さらに隣接諸地域の比較により当地域において製作された宝篋印塔の技術的系譜をさぐるための情報を集約してみたい。

当地域における古式と認められる基礎の残欠は、女川地藏院の、輪郭を巻き、格狭間を入れた1例のみである。

ちなみに手元の資料からこの形式の基礎を青森、山形、新潟の主として海岸部について抽出、表3に一覧した。

この8例をもって云々することは慎まなければならないが、気づくことは二段式が1件あるが偶然にも反花複弁一葉が大部分で、すべて格狭間入りであることであろう。このことは当地方の基礎とは全く次元を異にする点である。また花崗岩製のものが4例もあること、このうちNo.8極楽寺塔は鎌倉後期の近江式装飾文様を有する北限の塔として知られている。(川勝1957)花崗岩の露頭は庄内加茂の海岸にもあるので、この塔がもしそこから切り出し、製作されたものとすれば、男鹿加茂の流紋岩製遺品のごとく同地周辺に花崗岩製の遺品がほかに伝存していてもいいはずと思われるが孤立しているところをみると、あるいは蓮華文様の本源地からの直移入とも考えざるを得ないかも知れない。粟島には東岸に優白色の花崗岩がわずかに分布し、佐渡にも大佐渡の北端、小佐渡の東岸、中央部に花崗岩類が分布している(島津1982)が佐渡博物館の計良勝範⁵⁾(1973)によれば、称光寺塔は佐渡の石でないように思われるという。粟島塔(小野田1972)も恐らく島外からの搬入であろう。その他、安山岩製の海印寺塔



第14図 八郎潟周辺の主な板碑の分布

や十三、中山遺跡塔⁶⁾にしても反花に複弁一葉を配する普遍的手法(田岡1967)の踏襲は該塔が津軽、庄内地方の所産ではなく、移入塔であることを示唆する要素の一つとみられる。〔第16図参照〕

これに対し女川塔はまぎれもない加茂流紋岩を用いた地元産であり、複弁3葉という点でも上記の諸塔と

は異質である。そしてこれまでのところ八郎潟周辺においては鎌倉後期、南北朝あるいは室町前期に比定される複弁1葉、輪郭付格狭間入の基礎は全くその存在をみだし得ないのであり、この点は注目されてよいことと考える。すなわち逆説的表現であるが、この事実は当代石造文化の先進地域から宝篋印塔を移入しな

秋田県における中世宝篋印塔の型式と分布

くとも造塔の需要にこたえられるだけの技術を持った石工がすくなくとも鎌倉時代後期から八郎瀧周辺の産石地に存在していたことを示唆する以外の何物でもないということであろう。

ついで反花，壇上積格狭間入が2例，残余はすべて反花付，壇上積であった。壇上積み式について秋田以北の情報の持ち合わせはないが，関西形式圏の北端に入る若狭，越前，加賀の南西部をのぞいた越中，能登を中心にみると基礎は壇上積みが8，9割で，上端は壇上積み以上に反花式が徹底している。塔身には輪郭を作らぬものが多く，笠の段形は上5段から6段，下段は2段が多く，3段もある。隅飾は2弧が多いが3弧もあり，1段あるいは2段の基壇を設けるものが能登に多い。（藤原1959）

新潟県の場合を垣間みると佐渡相川の鎌倉後期，大蓮寺塔は壇上積み反花，複弁3葉，笠上5段下2段である。（計良勝範1973）内陸部の塩沢町（塩沢町1985）中頸城郡三和村，妙高村（藤原1959）においては室町期の基礎に関東形式があらわれるので，こと室町期に限れば新潟の内陸の一部は関東形式圏に入るらしい。

以上により越中，能登，越後，庄内と佐渡，粟島など日本海沿岸にみられる宝篋印塔の壇上積基礎の形式

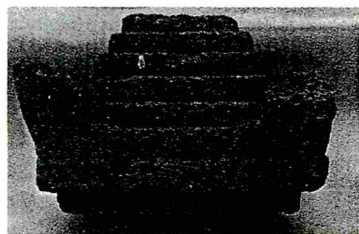
は秋田地方のそれと系統的に無縁ではないことが理解されるがその源流はどこに求めることができるであろうか。この点に関しては断定はできないが，現在ある程度の照準をしぼることができる客観的状況はある。

琵琶湖東岸の滋賀県蒲生郡は中世宝篋印塔の宝庫といわれる。昭和40年以来同地の石造遺物を悉皆調査している田岡香逸によれば日野町所在の蒲生貞秀墓転用の宝塔基礎をはじめ，北畑の八幡神社の正安元年（1299）塔が壇上積式在銘最古の遺品といわれ，以後日野町蔵王において同形式は卓越する。反花については大和で発生した新形式で上端二段形式と並び近江では両式が混淆しているという。（田岡1980）すなわち同地方は宝篋印塔の基礎における三茎蓮，開花蓮など近江式装飾文様ばかりではなく輪郭付格狭間入，壇上積に造る手法も同地で発祥したものと断定して差し支えないという状況である。このことはきわめて重要な意義を持っているものといわなければならないであろう。

かって筆者は，秋田県の鎌倉後期の流紋岩製五輪塔の製作工人を川勝（1957），田岡（1967）の論考に導びかれながらその系譜は近江日野町蔵王の石工の伝統と直接，あるいは間接的にかかわりあいをもつのでないかという推論を試みたことがあった。（磯村1977）その

表3 近県の輪郭付格狭間入基礎及び笠の段形

	所在地	基礎	笠		石質	年代	備考
			上	下			
1	青森県市浦村相内	—	6	2	凝灰岩	室町前期	
2	〃	—	6	2	〃	〃	
3	〃	—	4	2	〃	〃	
4	〃	複弁1葉			安山岩?	南北朝	
5	〃	—	6	2	安山岩	室町前期	
6	青森県五所川原中山	複弁1葉	6	2	安山岩?	鎌倉後期	『安東秋田氏展』図録
7	〃	〃	5	2	〃	〃	〃
8	山形県鶴岡市加茂極楽寺	複弁1葉	5	2	花崗岩	鎌倉後期	
9	〃	2・段	6	2	〃	〃	
10	〃 海印寺	複弁1葉	—		安山岩	南北朝	
11	新潟県粟島観音寺	複弁1葉	6	2	花崗岩	南北朝	新潟県教委『粟島』
12	〃 佐渡小木称光寺	〃	6	2	砂岩	南北朝	『相川町の歴史』墓と石造物



1. 市浦相内



2. 同左



3. 同左



5. 市浦十三



4. 同上



7. 同左



10. 加茂海邦寺

6. 五所川原
(『安東秋田氏
展図録』)



8. 加茂極楽寺



9. 同左



11. 栗島観音寺(『栗島』)



12. 佐渡称光寺
(『佐渡小木町の歴史』上)

第16図 近県の宝篋印塔

論拠とするところは羽前庄内加茂極楽寺跡に所在する輪郭付格狭間に近江式装飾文様を刻出した宝篋印塔と男鹿半島加茂産の流紋岩製五輪塔の残欠が昭和初年共伴出土したという事実をふまえてのことであった。そしていままた八郎瀉周辺の宝篋印塔の基礎の形式の源流を近江地方のそれに求めることが全く架空の推論でないという認識に立たざるを得ないように考えるのである。

これに対し、近江地方の石工技術の伝統を継承した工人の製作になる宝篋印塔であるとすれば、蓮華文や孔雀文を刻出した遺品が残っていてしかるべきと思われるが、それが1例も認められない事実をどう解するかとの反論があるかと思う。

当地方の輪郭付き、あるいは壇上積式の基礎は既述のごとくすべて反花を伴い、2段式は1例もなく、側面は格狭間入がわずか3例である。

格狭間に蓮華文を刻出するには相当の経費を要したと思われるのでそれを省略し、格狭間を入れ、上端を反花で飾るのが鎌倉後期、南北朝期当地方においては限度であった。しかし、年代を経、室町期に入ると格狭間を入れることも省略され反花のみに終始するようになったのではないか。

このことは宝篋印塔が造立された約一世紀間における石材の利用が鎌倉後期～南北朝は流紋岩、石英安山岩をもって輪郭付格狭間入、壇上積式格狭間入が製作され、壇上積式は、石英安山岩製が1例あるものの時代的に室町期と推定され、その他室町期と推定されるものはすべて輝石安山岩を用いるという実態とも無関係ではないように考えられるのである。

つぎに製作経費を理由に蓮華文を入れず、後に格狭間をも省略したとするのであれば、なぜより安価な二段式とせず反花式をもってしたのかという疑問がわく。

これについては今のところ仮定する有力な根拠はないが、反花式の最古は大和観音院の弘長3年(1263)であり、大和から近江へ伝播、近江では鎌倉時代の基礎約200基中、段形と反花がほぼ平行して行われる盛行ぶりであるが、発祥地の大和、山城では例が少ない(田岡1967) 点に注目し、近江地方での技法を習得した石工の当地方への移動と、塔身を反花で荘厳ならしめんとした造塔発願者への対応によるものでなかったかと

いうにとどめ、後日を期したい。

基礎ほどにその系統をあらわにしないが、笠の段形がすべて上5段に造られている点は一応、当地域の特色としておく。笠の段数について周辺地域をさきの表3と壇上積式の相川大蓮寺塔を加えてみる。移入塔と想定した復弁1葉(2段式)輪郭付格狭間内入に伴う笠に5段もあるが6段が多く下段はすべて2段である。相川大蓮寺は壇上積、復弁3葉、上5段、下2段で構造的に秋田と同一であるが、年代は先行し推定鎌倉期であろう。(計良勝範1973)

笠の段形は上6段、下2段が定形式といわれるが、この点、近江の場合をみると基礎側面を近江式装飾文で飾ることに終始し、笠の段形を軽視したため5段が顕著である。(田岡1976) ひるがえって地元産の石材を用いた当地方の笠の段形がすべて上5段としたのは経済的理由に基づく簡略化とも考えられるが、ここにも近江系の影響をみいだすことができるかも知れない。

笠5段が圧倒的ななかにあつて凝灰岩製の門前、寺内塔は移入の可能性が濃いことは既述した。特に門前のそれは赤神神社伝来の凝灰岩製石造狛犬一對の推定年代観、室町時代後期後半とよく符合する。寺内墓地塔はこれより若干年代がさかのぼるが、移入経路を同じくするものではなかったかと思われる。

室町後期後半以後、約半世紀間、秋田地方では凝灰岩製石造遺物の所見にめぐまれないが、前記凝灰岩製宝篋印塔の残欠は17世紀初頭から中葉にかけて秋田、津軽、松前諸地域へ進出する越前系石造遺物⁷⁾の先駆をなしたものと位置づけされよう。

以上、基壇、基礎、笠の形式等をめぐる問題点を中心に若干の考察を試みたがNo.32の稲川町広沢寺塔はこれらとは全く異なる範疇に属する。すなわち関東形式であり、本県中世の宝篋印塔としては最初の知見である。

広沢寺塔は基礎を反花に代って上2段、側面中央に束を立て左右輪郭をもって横位方形2区とし、ここに文明3年の刻銘が判読された。同寺中興の開基小野寺道興塔と伝承されるにふさわしいものである。また、この式の塔は「燃石岡＝五輪石あり」(菅江真澄1814)と書かれた大谷の墓地にも存在する⁸⁾形跡が認められる。県南各地での同形式塔の所在確認はかくて下野に

発する小野寺氏圏内の文化交流を復元する有効な指標
たらしめることができるであろう。

ま と め

1. 秋田県内所在の宝篋印塔に嘉暦、応永、文明の紀
年銘が検出され、造立の上限と下限を一応押えるこ
とができた。
2. 石材として地元の流紋岩、輝石安山岩、石英安山
岩等を用いたものが大部分である。形式的には日本
海沿岸の安東氏支配圏、八郎潟周辺は関西形式圏、
県南部の小野寺氏の本拠雄勝地域は関東形式圏に属
する。しかし雄物川を通じて関西形式の仙北地域へ
の嵌入もみられる。
3. 造塔の技術には近江地方の影響を蒙ったとみられ
る要素が濃厚であるが、同地方に特有の装飾文様を
刻出するに至らず、反花、輪郭付格狭間入、反花、
壇上積式格狭間入、反花壇上積式の三形式、笠5段
のタイプに定着し、造塔に当地方の経済的水準が反
映されているものと理解されること。宝篋印塔の製
作に携わった石工は五輪塔、板碑の製作にも当った
形跡が遺品の比較によって瞥見できること。
4. 青森、山形、新潟の日本海沿岸には鎌倉後期、南
北朝期の該塔の移入が認められるが、本県ではその
事例はなく、室町中期以降に及んで現われること。

今後の課題

1. 今回、県南部に関東形式の1基確認されたが、こ
の地域での悉皆調査と県北、大館、鹿角、由利地域
での調査が急がれる。同時に日本海沿岸、内陸諸県の
資料の対比により、秋田県所在の宝篋印塔のもつ歴
史考古学的異質、同質性を一層明確にし、中世の地
方文化交流史の中に正当な位置づけを与えなければ
ならないと考えている。
2. そのため、はじめにもものべたごとく五輪塔、板碑
等を網羅した総合的資料の操作を必要とする。この
観点からすれば県史段階以後板碑の集成が進展して
おらず、宝篋印塔の確認調査の続行とあいまって実
施したい。
3. 中世宝篋印塔の造立は約1世紀にわたるとみられ
る。その後、江戸期に入って造立されるまで相当の
空白時代がある。現在、江戸期の宝篋印塔は全県下

にわたり201基確認しているが、これを整理すること
によって中世との連続、非連続の実態とそれが意味
するところを明らかにしたい。

謝 辞

本稿をまとめるに当り県文化財保護審議会委員奈良
修介氏から県内石造遺物の全般について種々御指導を
いただき、京都の梵字資料研究所の斎藤彦松博士から
は四方仏種子等の解釈につき懇篤なる御教示を賜わり、
本文中にそれを引用させていただいた。ここに深く感
謝を申し上げます。

甲陽史学会主宰、西宮市の田岡香逸氏からは近江の
石造遺物悉皆調査、研究の成果につき著書ならびに書
信を通じて御教示いただいた学恩に対し心から御礼を
申し上げます。さらに石質の鑑別については日頃、秋
田大学名誉教授藤岡一男博士・加納博博士の御指導を
あおいでおり、本稿においても色々御示教をいただい
た。

県内外の宝篋印塔に関し情報をお寄せ下さり、ある
いは現地での調査に御協力下さったつぎの方々に対し
御礼申し上げます。

佐渡博物館学芸員 計良勝範氏、能代市 若松鉄四
郎氏、合川町教育委員会 桜田日出雄氏、同町文化財
保護審議会議長 御所野長三郎氏ほか文化財関係者、上
小阿仁村教育委員会教育長 北林浩作氏、同村文化財
保護審議会議長 鈴木万次郎氏、小林伴蔵氏、同社会
教育主事 笠井利通氏、秋田市羽黒神社 加藤鏡光氏、
東福寺 木村鈴信氏、雲祥院 関口泰雄氏、下新城岩
城 佐藤健助氏、男鹿市地藏院 工藤淳栄氏、洞泉寺
小島良充氏、宗泉寺 長谷川恵光氏、若美町福昌寺
村上栄潤氏、稲川町公民館長 高橋克衛氏、同町 福
島得夫氏、その他、多数の方々の御援助をいただいた
ことを記し感謝いたします。なお写真撮影、図版作成
等につき当館職員、嵯峨二郎、佐藤武視、渡部晟、嶋
田忠一の協力を得たことを付記する。

註

- 1) この縁起は天和2年(1682)10月、佐竹藩士梅津忠国の四子利忠が本山旧記により口碑に伝わることをあわせて撰定し、元禄7年(1694)正月、本山別当堯範に贈ったもの(狩野徳藏著『男鹿名勝誌』上, 1884刊)で、現在、赤神神社の所蔵である。
- 2) 男鹿図屏風, 秋田県立博物館蔵。6曲1双。高さ170cm, 全長7m, 正保の羽野一國絵図の筆者狩野定信の筆と伝えられる。右隻は赤神山日積寺, 左隻は赤神山光飯寺を中心に大小の堂宇が描かれており, さかのぼって中世末の状況をしのぶことができる貴重な資料である。
- 3) 当福寺所蔵。明和3年(1766)霜月, 23世調誉籠山の『安栄山曼多羅当福寺由緒』から寺歴の要点を摘録すればつぎのとおりである。
当寺は往古平鹿郡増田沢にあった。中世兵乱を避て秋田郡土崎湊に移建, 中興開山を文貞と号す。星霜移りて秋田郡男鹿嶋郷脇本村に浄空と名付く僧あり。恵心僧都筆の曼荼羅の図を庵の西壁にかかげ, 常に弥陀の称名を懈らず, 庵を西向庵と称し, 俗に曼荼羅屋敷ともよんだ。後年, 浄空は当寺の住僧となり西向庵をもって塔頭とした。この曼荼羅屋敷は現男鹿市脇本浦田字坂ノ上の俗称マンダラ堂跡であると推測される。現地には鎌倉後期の流紋岩製弥陀坐像, 地藏立像を水輪に陽刻した五輪塔があり, 貞和5年(1349)在銘の線刻弥陀石仏があった。
- 4) 米代川を上ったと考えられる中世的遺物は流域の中世城館より出土する陶磁によって代表されるが, 類例の少ない遺物として鹿角市小豆沢大日堂旧蔵鐘があげられる。鐘銘はつぎのとおりであった。
長禄四年(1460)八月十八日, 大檀那安倍師季別当沙弥藤原 浄通, 治工若州遠敷郡小南金屋鑄是供養導

師盛岡郷天台沙門広福寺権大僧都大阿闍梨法印覚翁敬誌(坪井良平『日本古鐘銘集成』による)

若狭小南金屋の鑄造で若狭から日本海一米代川を経て運ばれたものと推定してほぼ誤まりはないであろう。また, 安東氏と若狭, 鹿角大日堂を結ぶ遺品でもあった。

- 5) 佐渡博物館の計良勝範氏の教示によれば第17図12は砂岩質, 佐渡の石ではないように思われるとのことである。
- 6) 該塔は昨年4月14日から6月16日まで福島県三春町歴史民俗資料館において開展された開館3周年記念特別展に出陳されたもので, 図録「安東, 秋田展」を参照。
- 7) 室町時代後期後半から江戸初期にかけての越前笏谷石を用いた石造遺物は管見によれば本県では象潟, 本荘, 秋田市寺町, 土崎, 六郷, 横手, 湯沢, 男鹿, 能代等において認められる。秋田以北では深浦, 鯨沢, 十三, 弘前, 下北半島, さらに松前等にもみいだされる。川勝政太郎博士が「笏谷石文化」(『史跡と美術』421号)なる名称を用いられた昭和47年(1972)当時, 産石地をのぞいて, わずかに滋賀, 京都, 和歌山, 島根の事例を紹介されるにとどまっていた。これに比べ現在広域にわたり事例が発掘されている。笏谷石製石造遺物は中世陶磁と同等に, あるいはそれ以上に, 中世末・近世初頭の日本海文化交流の証言者たるの資格をもつものと考えられる。これについては稿を改めてのべるつもりである。
- 8) 昨年8月, 稲川町福島得夫氏が来館され, その際呈示された6枚のカラー写真をみると宝竜台墓地の一角に基礎の一部を礎石で埋め五輪塔水輪の上に笠をのせている。広沢寺小野寺氏塔に酷似するが, 本稿の時点では未調査である。

参考文献

- 川勝政太郎, 1957: 日本石材工芸史。綜芸社。
 〃, 1978: 日本石造美術辞典。東京堂。
 田岡香逸, 1968: 石造美術概説。
 〃, 1977: 石造美術概論Ⅰ, 石造美術, no.1この中で田岡は日本石造美術学上, 中世の時代区分をつぎの如くしている。鎌倉時代を文治~建武まで150年間を50年ごとに前, 中, 後期に期別, さらに25年ごとに区切り前, 後期に半別, 南北朝61年を20年ごとに期別室町を応永より慶長末年までとし74年ごとに期別, 37年ごと半別する。
 田岡香逸, 1967: 壇上積み式基礎考。史迹と美術。no.380。史迹美術同友会。
 〃, 1968: 近江の石造美術(1)一甲賀郡土山町坂田郡山東町, 東浅井郡浅井町一。民俗文化研究会。
 〃, 1969: 近江の石造美術(2)一高島郡新旭町一民俗文化研究会。
 〃, 1973: 近江の石造美術(6)一近江石造美術概説ほか一。民俗文化研究会。
 〃, 1976: 近江の石造美術(3)一蒲生郡日野町の石造美術一。民俗文化研究会。
 藪田嘉一郎編著, 1972: 宝篋印塔の起源。綜芸舎。
 奈良修介ほか編, 1960: 秋田県史一考古編有史の部, 秋田県。
 奈良修介, 1983: 板碑の地域相一秋田県。板碑の総合研究Ⅱ地域編。柏書房。
 大矢邦宣, 1983: 岩手県に所在する宝篋印塔とその分布について。岩手県立博物館研究報告, no.1, 84-58。
 深沢多市, 1933: 秋南古碑考。榊田凌次郎, 1963: 大曲市内の板碑について。大曲市郷土史資料第4集, その他磯村朝次郎, 1977: 秋田県における中世石造遺物の型式分布とその意義一特に鎌倉後期の五輪塔を中心として。秋田県立博物館研究報告, no.2, 75-107

- 大島建彦編, 1985. 男鹿脇本の民俗. 秋田文化出版社.
- 菅江真澄, 1811: 箒廻金椀. 秋田叢書第3巻, 深沢多市編 (1931)
- 〃, 1814: 雪の出羽路. 雄勝郡二, 秋田叢書第3巻, 深沢多市編 (1929)
- 藤原良志, 1959: 北陸に於ける宝篋印塔の形式. 史迹と美術, no.290, 史迹美術同致会.
- 斎藤彦松, 1957: 藤原・鎌倉仏教が四方仏史に示した特殊形式の研究 (参考要記). SP no. 11, 仏教史学大会
- 斎藤彦松, 1980: 梵字キリク字Hrih信仰の研究 (参考要記一第7表キリク字の内容分類表). SPno. 54-4, 日本宗教学会第39回学術大会.
- 〃, 1986: 羽後国四方仏梵字等の概要記. S.P 応答資料. AS, no. 19.
- 島津光夫, 1982: 日本海の島々の地質とその日本海および周辺地域との地質学的関係. 日本海の地質. 東海大学出版会.
- 計良勝範, 1973: 佐渡の墓と石造物. 佐渡「相川の歴史」資料集2, 墓と石造物. 相川町.
- 小野田十九, 1972: 粟島の石造遺物. 粟島, 新潟県文化財調査年報, no. 11, 新潟県教育委員会.
- 塩沢町教育委員会, 1971. 1973: 塩沢町における考古学. 民俗学の調査 I. II, 塩沢町文化財調査報告(2). (3).
- 秋田市教委, 1981: 後城遺跡発掘調査報告書.